

続・続  
私的アンソロジー

しあわせの構図

IV コラム 飛耳長目／

著作・投稿・寄稿

黒沼  
貞志

続・続 私的アンソロジー 「しあわせの構図」

IV コラム 飛耳長目／著作・投稿・寄稿

黒沼 貞志

もくじ

- 一 コラム 飛耳長目
- 二 著作・投稿・寄稿

## コラム 飛耳長目

一

コラム「飛耳長目」は2011年3月11日の東日本大震災の「原発事故への対応」で始まり、冊子「続私的アンソロジー」には2017年3月までの300件を超える掲載から取捨選択を経て90件余り掲載した。その後の5年間のコラム数は130件余りになる。今回はそれらの中から取捨選択して90件余りを選定して掲載する。すべてのコラムはHPのコラム「飛耳長目」( <https://www.sik-solutions.org/column.html> ) にアクセス願いたい。

中国の春秋時代、齊の管仲（？～前645）、法家の祖（）が、遠くのことをよく聞き知ることのできる耳と、遠くのことをよく見る（こと）のできる目を持つことを「飛耳長目」といったようだ。見聞を広め、物事を鋭敏に観察することの大切さを教えている。

日本では幕末、情報の必要性を感じていた吉田松陰が松下村塾のモットーにし、塾生たちに見聞を広めることを勧めた。

現代ではインターネットが飛耳長目の場でありツールであり、松陰たちの時代と較べると時空を越えて世界の情報を収集できるようになった。

情報の海の中から有意の情報を見つけ、整理・体系化して活用することにより、時代の潮流を読み取り的確な判断に資することが求められている。



画像出典

<https://ja.wikipedia.org/wiki/吉田松陰>

著作・投稿・寄稿

二

これまで様々な分野に投稿などとして掲載された拙文から次のような内容を掲載する。

- 1 幕末の科学思想
- 2 文化・スポーツ活動の発展のために
- 3 雪が舞う東北の地への風信
- 4 やましんサロン投稿記事
- 5 庄内日報「私の一冊」投稿記事

6 山形市立図書館記念講座資料（令和4年

3月6日）…「クオリティオブライフの

羅針盤（自分史の視点から）」

7 山形市立図書館記念講座資料（令和5年

3月5日）…「写真短歌」への誘い」

8 マイタウンあさひ掲載記事（新聞屋さんの

ミニコミ紙）

## コラム 飛耳長目

▼2023年1月18日… 老いは個人差をどんどん広げていきます “に得心”

和田秀樹氏（高齢者専門の精神科医）の著書「老人入門」今さら聞けない必須知識20講」の第14講の中の論考です。

確かに、同じ70代、80代でも「なぜこんなにも違うのか」と周りの人に感ずることがしばしばあった。特に、70に入った頃から心身の衰えを実感していたので遊学期に入ったばかりの今、身につまされるところ。

私の対策 Ⅱ

・寝起き時の30分の&日中のPC作業に疲れた時のストレッチ…書籍、ネット情報、TV情報などから何種類かのメニューを継続している。

・最近加わったのが喉仏の周りの「喉頭挙上筋群」の衰えを遅らせる効果が期待でき誤嚥性肺炎の予防策と紹介している玄侑宗久氏の著書で見つけた。

シャキア・トレーニング（布団に横になって首を挙げ、約1分自分の足の爪先を見続ける。最初は結構きつくて首に震えがくる。

ご参考…20講よりなるほどと思った講名を記す。

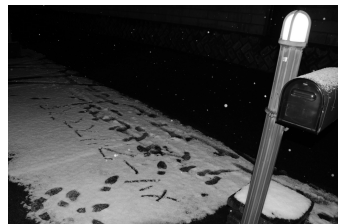
第1講 老いは本来、幸せな時間です／第4講 脳の萎縮と脳の機能低下は相関しない／第10講 免許は返納しなくていい／第13講 穏やかな老いを迎えるMHA病気という考え方／第14講 老いは同世代に障害者が増えてくるということ／第19講 「どんな年寄りになってやろうか」と考えていい年代

▼2022年12月17日：昨日（12月16日）の嬉しい出会い

当日の積雪が5cm程度だったこともあり雪かきをしなかったのが幸いしたのか夕暮れ時に玄関先に出てみたら写真のような嬉しい出会いがあった。

子供たち（？）の洒落たプレゼント（？）に連れ合いと二人して久しぶりにほっこりし頬が緩むひと時となった。

写真に一首詠草を添えて写真短歌に仕立てられたら…と思ったところ。



## ▼2022年12月11日：12月10日の地方紙のトップに 「防衛省「世論操作」構想」の記事

加えて次のようなサブキャッチ

- ・ 有利な情報発信、特定国への敵対心醸成
- ・ AI活用、SNS拡散

かつてこの国の敗戦につながった太平洋戦争で経験したのと同じようなプロセスの一端を垣間見るような行動に思える。

今の為政者の一部（防衛省）が進めているこの調査研究を上記大戦の史実に重ねてしまうのは当方の考えすぎだろうか？

記事の内容では・・・構想段階とはいえ2022年度予算の調査研究費を充て、「世論操作」の手段として調査研究を始めた由。

9月にインフルエンサーを担う委託企業公募の入札を実施、10月に世界展開するコンサル会社の日本法人に決めたという研究は23年度以降も3年間ほど続けるとある。

ここまで来ているのか、この先は見たくないと思つた（この構想が現実になる頃には当方は生きていないだろう）が。

## ▼2022年12月1日：久々の地方紙の小コーナーの「姥捨 て」という記事

厚労省や財務省が介護1と2の保険外しに前向きな姿勢を見せ始めているとして深沢七郎の「楢山節考」を例にとり次のように記述していて共感。

・・・老人は役立たずだからコミュニティから即時退場せよ、というメッセージを疑わない老母の順応性の高さが物悲しいが、他人事とは思えない。人は条件さえ整えば、悪政にだって順応してしまう生き物なのだから。・・・

遊行期の門（後期高齢者の仲間入り）をくぐったこともありまた身内が遠方にいるため最近情報収集を始めたばかりの身には他人事ではないテーマである。

「人生最後の日まで必要最低限のサポートを受けながら、つつましく暮らしたいだけ。しかし、それすら贅沢な願いになつてしまうのだろうか」と記す筆者が言うように少子化が加速し対策を見いだせないこの国は焼捨て山の時代に逆戻りするのかもしれない。

## ▼2022年11月24日：「荘内日報」私の一冊への投稿記事掲載となりました。

荘内日報にこのようなコーナーがあることを知友（短歌の先達）のリレー紹介で知り投稿する機会を得て投稿したところ11月22日の紙上に掲載される運びとなりました。

その依頼状には次のように記されているので紹介します。

「一冊の本を通して、人と出会い、読書が広がることを願って始まった「私の一冊」。2014年6月から地域新聞「荘内日報」に本の紹介コーナーを提供していただいております。「読書のまち鶴岡」をすすめる会から引き継いで、2022年4月より「チームまちじゅう図書館」が、連載を担当することになりました。」

文字数800という制限もあり何の本を選ぼうか悩んだ末に「一冊の本にまつわるエピソード」という切り口で藤原正彦氏著の「国家の品格」を選らんで次のような内容で投稿した次第です。

……  
タイトル…「名こそ惜しけれ」の精神

取り上げる一冊は少し古いが2005年発行の「国家の品格」。著者は作家新田次郎と藤原ていの次男で数学者の藤原正彦氏。たまたま書店で「国家の品格」という書名が目に入り購入。氏の書籍との初めての出会いとなった。

私がUターンする前に30年間の企業勤務を経験しその間で海外駐在を経験しているからだろうか特にこの本の第6章『なぜ「情緒と形」が大事なのか』の中の「真の国際人には外国語は関係ない」大切なのは「国語、読書などによる総合力」と言い切る多言語に長けた著者の言葉が重く心に残っている。

この論述に反応する自分には次のような社会経験があるからだろうと思っている。一つは企業入社して間もない頃の会社の英会話教室で米国人教師に「日本の結婚式で女性が身に付ける「角隠し」と「綿帽子」の違いは？」と問われ、私を含め誰も答えることが出来なかったこと。二つ目は後年の海外駐在現場のパーティ席上で欧米の技術者から日本の歌舞伎や文楽、狂言などについて問われてその答えに窮したこと。



日本語ですらうまく語れないことを英語で出来ないのは明らか。これらの苦い経験を記憶に留めて今の私があると思っている。Uターンして20余年、今やGoogleの無料翻訳など便利な時代となり隔世の感(過ぎたる便利に潜む不便利もあるが・・・)。

本書の最後の章「国家の品格」の最後の項「世界を救うのは日本人」に記されている次の箇所に強く共感を覚えるのでその一端を紹介したい。

「駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クロードルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和十八年に、パリでこう言いました。「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」

このような考えは司馬遼太郎の「名こそ惜しけれ」という精神に通底するのではと思うのは私の勝手だろうかと自問する今日この頃。



▼2022年9月25日:「Dr. コトー診療所」を再び再放送で見ている

16年ぶりの続編劇場版公開の予定(2022年12月16日)があるので再放送されていると思われる。ネット情報によると主な放送履歴は次のようになる。

第1期…2003年 全11話 / 第2期…2006年 全11話

プロデューサー、原作(漫画)、脚本、監督、演出、音楽、俳優らの「総合力」の成果なのだと改めて、つくづく思う。

優れた脚本作家やコピーライターが排出されていないからか最近のTVドラマやコマーシャルの質の低下を感じるのは自分だけなのだろうか・・・時代の変化といえそれまでだが。

▼2022年9月20日:ノーベルバークの旗手ゴダール逝く

ゴダールがスイスの自宅で医師の手を借り死を選んだとの報に接した。かつて(学生時代)に映画館で「勝手にしやがれ」を見た記憶がある。報に接して次のように詠んだ。

死を選びヌーベルバーグの旗手逝けり

暗がりの記憶勝手にしやがれ」

映画といえど同じく学生時代に見たフランスのヌーベルバーグに影響を受け、アメリカン・ニューシネマの旗手の一人アーサー・ペン監督「俺たちに明日はない」に触れた学内の新聞に投稿し掲載された拙論者も思い出す。テーマは学内のサークル活動に触れた「文化・スポーツ活動の発展のため」であったがこの中で映画などの脚本・批評の論客石堂淑郎の言葉の引用の中で次のように紹介している。

拙HPのアーカイブスの「寄稿・投稿・著作から」転記

石堂淑郎「映画における幻想と死」（デザイン批評・

1968・2・NO・5）より

・・・・・・・・中略・・・・・・・・

つまり、ボニーとクライド（アーサー・ペン監督「俺たちに明日はない」の主人公達）は、絶望をその両肩におぶったまま譲らず遂に殺され、創価学会・民青はその絶望を宗教的・政治的幻想という偽りの希望に肩代わりさせるのだが、少なくとも前者は精神的な疎外を肉体によってうけとめることよってプロテストしているのに、後者は疎外からより大

いなる疎外へと移行しているだけなのである。キルケゴール風にいえば絶望を絶望としてうけとめて死ぬのと、絶望を希望という名の絶望に肩代わりさせてニコニコするのとどちらがより絶望的であるのか、勿論、後者である。これをいま別の面から考えてみれば、学会なり民青なりの核である宗教的・政治的幻想は敵対者に対する憎悪をその唯一の栄養としていることがあげられる。つまり彼らのニコニコ顔は非同調者に対する憎悪の顔と表裏で一体であることを忘れてはならない。それは幻想という見えざる呪縛の力にとらえられている人間のつねである。

・・・・・・・・後略・・・・・・・・

▼2022年9月10日..「2人の瞳が捉えた被爆地 土門拳と江成さん」の見出し記事

酒田市美術館と土門拳記念館の共同企画展「2つのまなざし 江成常夫と土門拳ーヒロシマ・ナガサキ」の紹介を地方紙に見かけた。

土門拳記念館はこれまでも何度か訪れているが酒田市美術館への訪問の記憶はない。展示作品の状況とさかた文化財団名誉顧問に就任した江成氏（85歳）の写真も添えてあった。江成氏については当方にも縁がある。1995年神奈川報道写真連盟公募展（全国公募）で弊作品（とまり木）が大賞と

なりその時の審査委員長が江成氏で次のような講評をいたした。



「スナップ写真は周りの身近な風景や題材であっても撮影者の視点次第でしっかりとした作品になりうる。その視点で日常に題材を求め た大賞の「とまり木」は駅前のなにげない風景の中から社会の世相を切り撮っており、対象に向かう視点と作品作りの力量は評価できる」

写真集「花嫁のアメリカ」のほか氏の写真集を保有していたが次の詠草を詠んだ折の断捨離で手放してしまっている。

断捨離の成果の箱を古書店へこころ残りの帰路はたそがれ

(平成29年7月やましん歌壇大滝 保選・筆頭一席)

## ▼2022年8月30日：理想と現実のはざま

「核拡散防止条約（NPT）再検討会議が分裂」の報道に接して国際機関の機能不全を改めて思った。情報不足を顧みずに言えば次のようなポイントが原因かと。

・全会一致は原則としてもオルタナティブへの可能性を担保するのが原則では。

・国連でいえば第2次世界大戦の置き土産「常任理事国の拒否権」が時代の変化に対応できず各種決定の足枷となっている。

国内の卑近な話題で言えば直近の次の拙詠草（やましん歌壇掲載歌）にもあるように憲法改正が話題となっている。

ひたひたと足音聞こゆ改憲の数の揃うを報じるメディア

改憲を進めたい人たちの主な論点は「憲法が現実に合わせていない」「らしいが憲法はあくまで理想、あるべき姿を示すもので現実との間に生じる齟齬は法律やその他の手段で対応するものではないか」という考えに立ちたいも

のだ。権力を握ったものの常として保身のために憲法変えてきた海外の多くの事例を待つまでもない。

## ▼2022年8月15日：ドキュメント72時間「歴代（10年）ベスト10」を見る

「ドキュメント72時間」は2013年（平成25年）4月5日からNHK総合で放送されているドキュメンタリー番組です。当番組はほぼ毎回見てきたが今回は放送10年目の初めての企画を録画で見ている。最初が10位の「恐山」。

この番組「恐山」を見て半世紀以上前にもなる大学4年（1968年）の夏休みに保有する自転車（10段変則機能付）で無謀？にも「東北6県一周1,500km」を実施したことを思い出した。その途中に「恐山」に立ち寄り写真も撮った。

宿泊…国民宿舎、ユースホステル、寺、友人宅など。／コース…山形↓酒田↓秋田↓男鹿半島↓青森（↓下北半島恐山）↓盛岡（↓宮古）↓仙台↓福島（↓会津若松）↓米沢↓山形／一日の平均走行距離は約70km／各地の名勝なども堪能しながら約20日間の一人旅。

恐山の写真は霧囲気を出すためミニコピーフィルムに反転してポジフィルムを作り、3枚組に仕立てた。その後（平成22年）に短歌を嗜むようになって次のような詠草を添えて写真短歌の作品とした。

地の果てにひとり佇み眼閉づ自ずと湧き出づ彼岸の世界



## ▼2022年8月2日：為政者（政治家）の老化

安倍元首相の殺害に端を発し政治家の旧統一教会（以下「教会」と）との関係にメディアが騒がしい。殺害の動機の解明が報じられるようになり政治家たちと教会の関係、その根っここの部分に光が当てられようとしている。個人的感想が許されるなら偏に政治家の「栗田」が根っこにあると思う。因みに地方議会レベルの話になるが議員は当選した翌日から4年後の選挙が頭の中の重要度第1位と揶揄されている。

関係が取りざたされる政治家の発言に「逃げ腰」「居直り」の発言が際立つ。何が問題なのか分からないという2世(?)議員の発言には聞いた口が塞がらない。まして、警察組織を管理する国務大臣でもある国家公安委員会委員長が関係を認めたということが報じられて言葉を失ってしまふ。

これまでも何度か紹介しているが司馬遼太郎の著書やTV番組で紹介されている言葉【名こそ惜しけれ】に再び光をあてなければならぬのではという思いを強くする。

## ▼2022年7月23日：謝罪無き謝罪（地方紙の小コラム記事）に得心

最近の為政者の以下のような発言・暴言を例にして「謝罪無き謝罪（英語では non-apology apology, fake apology）」とし社会全体の倫理観の欠如と指摘していた。

家計の値上げ許容…日銀の黒田総裁／野党の話は、政府は何一つ聞かない…山際経済再生担当相／弱い子がいじめられる。強いやつはいじめられない。国もおなじだ…麻生副総裁

また、筆者の次の指摘は誰が考えても得心が得られると思ふ。

・「誤解を与えたのであれば申し訳ない」といった類の発言は誤解の「余地」がない発言にもかかわらず、自分に全ての責任はなく、誤解した方も悪いとどの言いぶりだ。

・謝罪は弱者がするもの。強者は謝らない。「謝罪無き謝罪」横行の背景には、こんな考え方も見え隠れする。

誠実さを失った為政者の言葉が、一般社会に影響を与えないことを願いたいと記事を締めていたが・・・流布される情報を見る限り世間は既に毒されているのではないだろうか？

## ▼2022年7月21日：「カーボンニュートラルやまがた県民運動」の新聞記事

7月17日の地方紙に「県、省エネ推進キャンペーン 家電買い換え CO2削減」という記事掲載があった。

ふと、思い出したのが「LCA（ライフサイクルアセスメント）」。かつて勤めた企業で仕事の関係でこの概念に合って多少は勉強した。馴染みのない方のために簡単に概説すると次のようになる。

LCA：ライフサイクルアセスメント (LCA: Life Cycle Assessment) とは、ある製品・サービスのライフサイクル全体（資源採取―原料生産―製品生産―流通―消費―廃棄・リサイクル）又はその特定段階における環境負荷を定量的に評価する手法である。

かつて、いや今も日本には「もったいない」という品物に限らず自然からのいただき物まで大事に使う考えがある。一時、車の排気ガス（CO<sub>2</sub>）低減のため新車への乗り換えキャンペーンが叫ばれたことがある。その時には使いたれた車と新しい車の比較を燃費、CO<sub>2</sub>排出量だけの比較（新しい方が良いのは自明）だけではなくLCAの視点で比較する発想が必要ではと痛感した。

現在どこを向いてもSDGのやカーボンニュートラルへの取組みなどに関する情報で溢れている。これらを推進する場合は時流に流されずLCAという原点、根本を分かった上でお願いしたいと思うし、取上げるメディアにもその観点にも触れて欲しいと思う。

## ▼2022年7月15日：安倍元首相が狙撃され死亡したニュースには驚いた

メディアは国内、世界からの弔意を一斉に取上げている

がブーチンからもあったというニュースに聞いた口が塞がらなかったことを覚えていて。死者に鞭打つ人は嫌われるが公人とりわけ政治家の場合はどうなのだろう？多面的な評価が必須なはずにも拘わらず殆どのTV局ニュースは死を悼むシーンと事件の真相を追いかけるばかり。

少し落ち着けばメディアが「功罪」としてしっかり取上げること期待しているところに突然、「国葬」という閣議決定のニュース。その持つ意味を自分の中で整理がつかない中、総理のその理由の発言に？？？なのが実情。少なくとも野党の考え（正式な声明）が示されてしかるべきなのだが・・・Facebookの友達の投稿で最初に目にした声明文が「れいわ」らしいと知り驚いた。何れにしても国会での論議が待たれる。政党からはフリーハンドの立ち位置にあっても次のような印象を持つ。

政治家は「言葉」とよく言われるが実行されてこそであり、アベノミックス、美しき日本、三本の矢、一億総活・・・挙げたらきりが無くそれらの総括は目にしたことが無い。森友学園、桜の会など多くの疑惑・問題の黙殺、これで間違いないくうやむやになる。デフレ脱却はいづこ？

▼2022年7月4日：KDDIの大規模通信障害に見る「過ぎたる便利に潜む不便利」

ここ数日メディアが騒がしい。特に気になるのが社会インフラ、その中でもセーフティネット（救急医療、保健所機能・・・挙げたらきりが無い）への影響。

拙HPの先に紹介した「コラム『飛耳長目』」で紹介した内田樹氏の論考でも触れたように「危機管理の欠如は日本人の国民性？」らしい。便利なネット社会を享受するには特に社会インフラのシステム基盤をシングルではなく少なくとも二重化が求められると言えそう。

▼2022年7月2日：最近のNHKTV（&ETV）ドキュメンタリー番組が面白い

先（2月）にNHKETVドキュランド「メルケルが残したものの16年間の足跡」（1月14日初回放送）」を紹介したが最近は次のような番組を録画で見ている。

- ①映像の世紀 バタフライエフェクト「スターリンとブーチン」
- ②アナザーストーリーズ 運命の分岐点「発見！ナチス略奪絵画 執念のスクープの舞台裏」

③NHKETVドキュランド「権力と闘うあるロシアTV局の軌跡」

番組の切り口の差違がそれぞれの番組名に現れているように思える。ロシアのウクライナ侵攻と相まって自分の関心を呼び起こしたのかもしれないが何れも自分の世界の歴史に対する無知ぶりを痛感させてくれる。

▼2022年6月27日：玄侑宗久氏のエッセイ集『なりゆきを生きる』『つるの奥山つづら折れ』『こいつて』

図書館で目に留り（書名に惹かれ）借りて読んでいます。氏は臨済宗妙心寺派福聚寺第35世住職。

はじめて氏の著書に接しているが本著は東日本大震災の翌年の2012年4月から（\*）およそ7年半東京新聞（および中日新聞、北陸中日新聞）に「つるの奥山」としてほぼ月1回のペースで連載されている由。\*全く関係ないが拙HPのコラム「飛耳長目」は震災のあった2011年3月30日に「題・原発事故への対応」でスタートし現在も掲載中。

著書の「まえがきに代えて」の中で、「なりゆき」という言葉はいい加減で定見のない在り方を批判的に言う場合にも使われるが、本来は逐一変化するプロセスも踏まえた正確な現状のことだ。生きるのにこれほど大切なものはないはずだが、常に更新する負担があまりに大きいため、諦めて「なり

ゆき」という言葉じたいを貶めることにしたのだろう。と紹介されていくほど得心。

心に残った箇所を二つほど引用してみる。

♪一つ目…栗の花 (2014年7月) から

・ ・ ・ 禅の世界は、管見だが、喪失後の世界である。人は加齢と共にさまざまなものを失うが、禅の道場ではこれが若いうちから無理矢理奪われていく。情報、交友、便利な道具、などなど。そして失ったあとでも通用する新たな価値観に目覚めていくのである。梅雨の潤いのなかで、栗の花がしずかに咲いている。仮設住宅の暮らしが長びくなかで、県内ではそれに気づく人も多いことだろう。喪失したからこそ、やがて人は「よく見る」ようになる。まもなく「夏草や」の季節だが、喪失後の世界を「夢の跡」と見れば、ぼうぼうに伸びた夏草も狂おしいまでの命の躍動に見えるはずである。

♪二つ目…喉仏の効用 (2017年7月) から

・ ・ ・ 肺炎の菌は健康な人でも口の中に常在している。だからほとんどどの肺炎の原因は、自分の口中の菌を食べ物と共に誤嚥し、それが気管から肺に入ってしまうことだ。なぜそんなことが起きるのかといえば、喉仏の周りの「喉頭挙上筋群」が衰え、筋肉が全体的に下がってしまったため、気管の蓋が閉まりにくくなるからだという。・ ・ ・

そこで、氏は喉仏の鍛え方<sup>①</sup>を紹介している。

①シヤキア・トレーニング ②嚥下おでこ体操 ③顎持ち上げ体操

興味ある方は調べてみては如何でしょうか？  
かつて(4年前)持病について詠んだ短歌を師匠阿部京子先生(3年前に他界)から「やましん歌壇」に掲載していた。

一病とつき合いてはや半世紀

遊行の門への錫杖とせむ

この3月、遊行の門を通過したのでこれからの錫杖は何になるのだろうかという思いに至っている。

弊主治医からは「持病(機能性ディスペプシア…昔で言えば慢性胃炎)で死に至ることはまずない。あるとすれば肺炎でしょう(それも誤嚥による)」と聞いていたことからこの章「喉仏の効用から」が気になった次第。

▼2022年4月2日:中井貴一が言う「自分は『じゃない』方へ行く」の意味するところ

中井貴一が甲斐よしひろと出演した番組(Eテレ「SW ITCHインタビュー達人達」)を録画で見た。3月27日の放映だが心に残った中井の言葉とその意味するところへの感慨を記してみる。

♪「自分は『じゃない』方へ行く」…

中井が「正統派俳優」と呼ばれることへの本音を甲斐に打ち明けていた。



成蹊大の学生だった1981年に映画「連合艦隊」でデビューし俳優人生40年が過ぎた中井。しばしば人に中井が「正統派」の俳優と言われることに対して自分では「正統派ではない」と思っている」と言い、世の中の流れや流行の方へは行かず「自分は『じゃない』方へ行く」と話していたのが印象的。

因みにNHKの人気番組「サラメシ」のナレーションはハイテンションの話し方をしているが、これは

「(普通のように話さず)ずらしてやっている。基本にあるものまで削ってしまったら、単なるだらしないものになる」。あくまでも「正統」という基本をベースに、そこから派生した「ずらし」であるということを強調していた。

そして、俳優としての究極のスタイル「(セリフを)棒読みでも感情が通じるのが終着点」と述べていたのが印象的で、「いろいろなことができるけれど、やらない、使わないになつてみたい」と話していた。

♪着崩しについての中井の発言から(妙に得心した  
が・・・結構難しいと思う)...

「着崩し」は楽にする方法なんですけど、きちっとした着方を知ってるから着崩しになる。単に楽にするだけならだしなくなるっていうのが自分の中にあって。きちっと着る方法を自分の中で定義として持とうというのは持っているんです。

世の中の流れに乗っている人たちに安心感を覚えるんですけど、僕はそれが昔から好きじゃなくて、「じゃない」方にいる。それがサラメシのナレーションとか、結構ずらして。最初にもらった原稿よりもずらして。残さなきゃいけないもの、ここを削ったらだしなくなるみたいなことは避けよう。

参考までに10年前の本HPのコラムで中井のTBSの「サワコの朝」の番組で中井が語ったことに触れているので参考までに次に記す。

2021年6月30日 TBSのTV番組「サワコの朝」で思ったこと

最近土曜の朝のこの時間帯にこの番組を見ることが多い。土曜の朝の一仕事を終えたばかりの頭にちょうど良いのかも知れない。この日のゲストは俳優の中井貴一だった。有名な

父を持った苦勞などよく耳にする話はさておき、次のような話が残った。

＊俳優（例えば男優）の真骨頂は【助演男優賞】

＊主役は助演の人から「主役」にしてもらうもの

＊主役が高いギャラを貰うのは主役だからではない。関係者（スタッフ、助演者、照明・・・）が持ちよく仕事が出るように（例えば健康管理にまで）気配りするのが主役の役目であるためにギャラが高い。

＊「最近仕事で頑張っていますね」というサワコ女史の問いに対する彼の答え…3. 11以降に自分に何ができるかと考えた時の「答え」として、「自分が生業で一所懸命働きその結果としての税金をたくさん納めそれが廻るようにすることも自分のできることだ」

### ▼2022年3月21日：地方紙の小さな記事「福島原発処理水使いヒラメ、アワビ飼育」に思うこと

昨日の地方紙に見つけた小さな記事が気になった（東電が9月頃から試験とのサブ見出し）。地元から「専門的な言葉や数字より、魚を飼って影響がないことを実証して欲しい」という意見があり「福島沖で取れて飼育しやすい魚と貝を選んだ」とあるがこの意見とは東電のプロバガンダと想像がおよぶのは仕方がないだろうと思う。

何よりもトリチウムなどの影響が魚介類に現れるのに一体どの程度の時間を要するか見通しが立たないだろうと予想されるが東電がそのような観点を気にしているとは思えない。間近だと思う処理水の海洋放出までにその結果出ることは無いのは自明（百も承知）であることからプロバガンダと言われる所以と思える。事象を単に書くだけがメディアの役目ではないのも自明。その事柄の意味することにも一言触れるべきではないかと改めて思った。

### ▼2022年3月11日：報告 山形市立図書館企画講座『クオリテオプライフの羅針盤（自分史の視点から）』

図書館の計らいで2021市民の出版物展を記念した企画講座の依頼を受け久し振りに人前で1時間半話す機会となった。

・日程…令和4年3月6日（日）、1時間半の講座  
・テーマ…クオリテオプライフの羅針盤（自分史の視点から）

先のコラムで山形市立図書館「2021市民の出版物展」のご案内をしたが、今回はその展示を記念して企画された「講座」。当方の拙い経験を交えて話をする事になった。生憎の悪天候（雪）だったがお陰さまでほぼ募集定員の参加者があり主催側の開催主旨の内容が提供できたのではないかと思っている。“講座の位置づけに代えて”で紹介した

「啐啄同時」にあるようにこの機会を活かすかどうかは参加者次第だろうと思う。  
講座のために準備した資料…

♪ 配布資料…

・説明資料…記念講座PP資料

・補足資料…DVD「私的アンソロジー」のカバーシート／同「プロローグ」／同「メニュー&マップ」／倉本聰の「履歴書」

♪ 机上紹介資料…

DVD「私的アンソロジー」／冊子「統私的アンソロジー」しあわせの構図<sup>①</sup>／山形げんきであったかづくり…冊子&掲載URL／やまがた食の甲子園<sup>②</sup>10年史…冊子&掲載URL／地域力共創推進コンソーシアム「活動の15年の軌跡」…冊子&掲載URL／東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み

▼2022年2月7日：「メルケルが残したものと16年間の足跡」（1月14日初回放送）で印象に残ったこと

掲題番組（ドキュランド…NHK Eテレ）を録画で見た。  
ドキュメンタリー番組として興味深く見ることが出来て中々も次の二つの言葉が強く印象に残った。

・「緊急時に人に優しくしたことで謝らなければならないのなら、ここは私の国ではありません」

これは2015年のシリア難民の受け入れを決断したことに対し通過国ハンガリーはもとより自国ドイツからも反対や批判の声があった時にメルケルが述べた言葉と紹介されていた。背景にはナチスドイツの反省や自国の憲法の規定に基づいていると説明されていたが、自身のかつての苦い経験も背景にあったようだ。

・「すべてのことには、時がある」

クリスチャン（プロテスタント）でもあるメルケルが退任する際の言葉として紹介されていた。クリスチャンではないので調べてみたら旧約聖書「コヘレトの言葉」の冒頭の2行目から引用したと思われる。世の中の諸事や自身のありよう（来し方、行く末）を憶う時、なかなか含蓄のある言葉と思う。

何事においても最もふさわしい時期があり  
この世の中のすべてのことには時がある。  
生まれる時があれば、死ぬ時がある。  
植える時があれば、植えたものを引き抜く時がある。

く 中略 く

引き裂く時があれば、縫い合わせる時がある。

沈黙を保つ時があれば、口に出して言う時がある。

愛する時があれば、憎む時がある。

戦う時があれば、平和の時がある。

## ▼2022年2月1日：雪国の車道の除雪 間口除雪で再び思 うこと

1月29日の地方紙のコラムに「道路除雪を考える 時代  
に合わせ負担を軽く」という論考が載っていた。

かつて、当方のHPのコラムやコミュニティFM放送で番  
組を持っていた頃に間口除雪を取上げたことがある（「公  
助」の先進地の状況@ 村山市「雪の間口除雪」を考える」で  
思うこと(2015.02.20)）。

戸建てに住むようになって約13年、間もなく後期高齢者  
の仲間入りの年齢になると車道の除雪で除雪車が車道の間口  
部分に残していった固く重たい残雪の処理が身体的にきつく  
なってきた。私が住む山形市は車道の除雪は「公助」、間口  
にあたる車道に残された雪の除雪は「自助」とされていると  
理解でき、その処理業者が市のHPに紹介されている。

この車道上の間口除雪の課題は公助の限界もあり仕方がな  
いように思えるが、せめて除雪車の除雪技術の改善指導は公  
助の業務として貰いたいとおもう今日この頃です。7年前に  
上記の弊コラムで記した当時の村山市の事例を参考に記した  
部分を再掲載したい。

### 【課題解決の3本柱（核となる資源）】

- ① ハード（インフラ・設備・システム）
  - ② ソフト（ハードの運用・活用の要領・制度&しくみ）
  - ③ ひと（利用者…消費者&ハード・ソフトの運用者）
- 特に大事なものはこれら柱の①②や財源が不足する時に、その  
代替として期待がかけられるのは、**△足りないところを「ひ  
と」の力で補うという発想。**
- 例えば
- ・ 委託業者の除雪技術の研修（定期）などの実施
  - ・ 間口を避ける除雪要領の検討、標準化とその徹底
- 今回の村山市の先進事例紹介におけるポイント（下記）は上  
記の②ソフトと③ひとの力で補うということを指摘している。
- ・ 「日中」強化へ 平準化図り、費用を抑える↓集中実施から  
分散実施
  - ・ 県道は難しい 「特別実施は難しい」↓県、隣接市町村と  
の連携
  - ・ 委託業者、市、市民 「三位一体の対応」が必要↓市と委託

業者による勉強会、市民から冬季未使用空き地の提供（雪捨て場）」

## ▼2022年1月10日：山形新聞取材記事 「山形市バリアフリーガイドマップの【多言語化】」

山形市福祉のまちづくり活動委員会活動の進化形（？）でしようか「山形市バリアフリーガイドマップの【多言語化】」が山形新聞に取上げられました。先の掲載案内した当委員会の今年度の掲題事業が山形新聞の記者の目に止まり、昨年末に取材を受け1月9日付けの山形新聞で添付のように記事掲載の運びとなりました。

その記事に加えて当委員会のその他の活動（約20年）に関心をお持ちの方は運営サイトにアクセス願います。

URL : <https://www.yamagatashi-fukushihinomachi.org/>



## ▼2021年11月12日：お寺の掲示板（江田智昭著・新潮社）を読んでみた。

新聞の紹介記事にあった（紹介されたのは発刊間もない続編「お寺の掲示板 諸法無我」であったが利用する市立図書館にはなかった）2019年に出版されたこの本を図書館で借りることになった。たまに訪れる寺社の前に掲示板があることは承知していたので興味をもった次第。著者は2018年に「お寺の掲示板大賞」を創設しているらしい。その時の第1回大賞は「おまえも死ぬぞ 釈尊」でこの冊子の中で紹介されている。

この本を読んで掲示板も捨てたもんじゃないと再認識したところですが、加えて「終活すること あなたの成仏とは無関係です」という掲示板を取上げその解説で触れていた思想家内田樹氏の著書「ひとりでは生きられないのも芸のうち」を知り、早速図書館に借り出しの申込みしたことも触れておきたい。

以下に、なるほどと思った「言葉」を幾つかランダムに紹介しますので関心を持たれた方は手に取って見てください。

・ばれているぜ・・・冊子の表紙になっています

・人生が行き詰るのではない 自分の思いが行き詰まるのだ

・辛十一―辛

・お墓参りはご先祖様とのオフ会

・言っていることではなく、やっていることがその人の正体  
久田恵

・死は、いつか来るものではなく、いつでも来るものなの。  
樹木希林

▼2021年9月30日：山形新聞取材記事 「15年の地域活動 一冊に山形・共創コンソーシアム」

当方が主宰する地域力共創推進コンソーシアムの冊子発行についてはこれまでも記していますが、この度、山形新聞社の取材を受けて記事掲載となったので紹介します。

▼2021年9月2日：国立国会図書館のデジタルコンテンツ収集について

当コラムで弊冊子「続 私的アンソロジー」しあわせの構図」の発刊に関して次のように紹介してきた。

・2017・11・25…冊子発行／2018・2・25…  
同デジタルブック（電子ブック）の公開／2018・7・  
7…同冊子の公的機関への寄贈（&納本）

また、当方が主宰する地域力共創推進コンソーシアムの「15年の活動の軌跡」の発行にあたりコンソーシアムの事情やより多くの方々が届けるためパソコンやスマホ端末でこの冊子を読んだり印刷することが可能な「電子ブック」とし



て5月末に発刊し7月にWeb公開した(2021.7.25付け当コラム参照)。

その折に公開され巷に溢れるデジタルコンテンツの収集の実情が気になり国立国会図書館へ問合せたところ「インターネット資料収集保存事業」があることを知るに至った。

早速HPにアクセスして上記弊冊子を申請したところ収集対象であると確認したのでその作業に入る旨の返事を貰うこととなった。引続きこれまで関わってきた次のようなアクティビティのデジタルコンテンツについてもその申請を検討してみたい。

山形市福祉のまちづくり活動委員会／おいしい山形の食と文化を考える会

▼2021年8月23日：再び内田樹の論考(地方紙掲載) ..  
「無意味耐性」高い人たち

この論考で「無意味耐性」という表現、言葉を初めて知った。氏は「意味のない言葉を口にしても気にならない」人のことを「無意味耐性の高い人」と規定して面白い論考になっている。主な指摘を紹介する。

・先の(8月6日)広島での平和祈念式典で、菅首相がスピーチの一部を読み違えたことが報道された。「原爆」を「原登」、「広島」を「ひろまし」と読むなど7カ所。更に問題は核廃絶に向けた日本の立場を示す約120字を読み飛ばしたことである。そこには「わが国は、核兵器の非人道性をどの国よりもよく理解する唯一の戦争被爆国」「『核兵器の無い世界』の実現に向けた努力を着実に積み重ねていくことが重要」などの文言が含まれていた。

・原稿が糊でくっついてはがれず、1枚飛ばしてしまっただけで、「完全に事務方のミス」という言い訳。・・・そこから知れるのは、首相がこのスピーチの草稿に事前に目を通さずに式典に臨んだらしいということである

・そのこと以上に私が当惑したのは、首相が意味をなさない文を平然と読み続けたということである。ふつうは起きないことだが文法的にかたちをなさないセンテンスを読むと、私たちは「気持ちが悪い」と感じる。しかし、首相はそこで立ち止まることをせず、意味をなさない文を平然と読み続けた。これはかなり深刻な問題だと私は思う。というのは、この事実から私たちは首相が「意味をなさない言葉を人前で堂々と話しても気にならない人だ」ということを知ることができるからである。

・「意味のない言葉を口にしても気にならない」人のことを私は「無意味耐性の高い人」というふうに呼んでいる。無意味な言葉を朗々と読み上げることができ、無意味な仕事に必死に汗をかくことができる人たち、それが「無意味耐性の高い人」である。これは現代日本ではある種の「社会的能力」として高く評価されている。

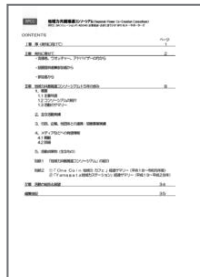
・上意下達組織において最も重んじられるのは「イエスマンシップ」であるが、これを考査するための最も簡単な方法は無意味なタスクを課すことである。・・・組織が上意下達的になればなるほど、「ブルシット・ジョブ（まったく無意味な仕事）」が増えるのはそのせいである。今、日本人は「無意味な言葉と無意味な仕事」という「おろし金」で日々すり減らされている。

## ▼2021年7月22日 地域力共創推進コンソーシアム 令和2年度事業「15年の活動の軌跡」発行

当方が主宰を務めるコンソーシアムの令和2年度の事業企画は・・・これまでのコアな参加者や話題提供者の協力をいただいて「＼コンソ15年の活動の結果（軌跡）＼を制作する年」・・・としておりました。当該事業はコロナ禍が進む中関係各位の協力を得ながら進め、年度を跨いでしまいました。がようやく発行の運びとなり当初の予定のとおりデジ

タルブック（DB）による冊子として当HP内の「Activity」に掲載して公開いたしました。

なお、DBの中に記しましたURLで一部該当情報が展開され無い箇所がありますので正誤表として整理しております。お手数ですが御了承のうえご覧いただけますと幸いです。また、DBにはPDF機能を付与していますので必要箇所のプリントも可能ですのでご活用ください。



## ▼2021年3月27日：再び数値の母数について「人口十万人当たり」の感染確認者数

山形県にも緊急事態宣言がなされそのニュースで人口十万人当たりの感染確認者数が宮城県、沖縄県に続いて全国第3位と報じられた。「人口十万人当たり」の数値は久々の表現。



以前にもメディアで日々報じられる感染確認者数にこの「人口十万人当たり」の感染確認者数を併記すべきではと記したことがある（時折その数値を見ることがあったが・・・）。単に都道府県の感染確認者数の増減に一喜一憂することなく冷静にこの数値の変移に注目することも大切なのではと思っているが殆どのメディアは単純に日々の感染確認者数の増減が殆どでありそれで十分な情報とは思えない。例えば、山形県や山形市の昨年3月からの「人口十万人当たり」の感染確認者数の推移を知りたいと思えばWeb検索してみたらフィットするデータは見つからず、漸くそれに近いデータに辿りつくことができた。

★今年に入ってからの感染確認者数の推移…

★【都道府県別】人口あたりの新型コロナウイルス感染者数の推移（ただし、データは「日間の新規感染者数（人口100万人あたり）2021/03/27現在）…

更に、欲を言えば日々の感染確認者数はその時のPCR検査数も付記があればと思う。つまり、常時、検査陽性率も知ることができれば感染確認者数の変化の傾向を知る指標にもなると思われる。高齢者は今後も（あと1年？）厳しい状況が続くと思ひ慎ましく生きるのみ・・・だろうか？

▼2021年3月24日：他山の石、そして、空をそらと理解していた歌舞伎役者

「他山の石」はしばしば使われる言葉。四書五経のひとつ「詩経」の記述に基づく故事で、「他人のつまらぬ言行、誤りや失敗なども自分を磨く助けになる」という意味で使われる。

2019年7月の参院選広島選挙区をめぐる、公職選挙法違反の罪に問われた元法相で衆院議員河井克行被告の裁判での発言に対し、自民党の二階幹事長がは23日午前、「議論の余地のないこと。党としても他山の石としてしっかりと対応していかなければならない」と述べた会見（ぶら下がり？）をこの日のTVニュースで見た。思わず苦笑してしまった。他山ではないだろう！自分の山（党）のことだろう！と。

先のコラムで「日本の政治家たちの言葉はあまりに空疎だ」という新聞記事を紹介したばかりでまたこの失言？に出くわした。いや、失言ではなくて幹事長の資質なのだろう。この人が党の幹事長でいられるその辺りにこの党の問題（自浄作用が働かない）があるのだろう。まさに老害の典型とも言えるのでは・・・。

この場面をみていて不意に次の記憶が甦ってきた。

般若心経の中に「色即是空 空即是色」という件（くだり）があるのは周知の通り。かつて（2013年2月27日）、十二代目市川團十郎が他界した際、息子の市川海老蔵が「團十郎が般若心経から『色は空空は色との時なき世へ』という辞世の句を残した」と紹介するTV映像を見たが、その場面で海老蔵がその辞世の句を紹介する時に「空（くう）」を「そら」と読んでいた映像をみて絶句したこと

を思い出した。  
当方も詳しくはないが写経などを経験する機会があったので多少の知識があった。さすがに海老蔵のこのレベルを知って以来、海老蔵が出てくる歌舞伎などの映像は素直な目で見れなくなりました。上記2件の例に共通しているのは・「言葉の重み」への理解とそれ語る際の自覚と言えるのではと思った。

### ▼2021年3月21日：人を動かす言葉 地方紙の小コーナーから

地方紙の小コーナーに久しぶりに心に留めたい記事を見つけたのでピックアップする。野球の故野村監督の事例を元西武監督の渡辺久信（現西武GM）の言葉を触れている。

・・・プロ野球選手なのでカウント別の投手の心理、打者心理など有る程度理解していたが、「あらためて言葉で説明されると『ああ、この人すごいな』って素直に思え」た、「野

村さんはしっかりと言葉で納得させてくれる監督でした」・・・。

やはり、大事ななのは言葉の力なのである。

・・・「政治家に一番必要なのは言葉による説得力」だと『ローマ人の物語』で有名な作家塩野七生も語っている。戦没者を前にして残された者たちがどう生きるべきなのか、死の意味を考え、「できれば喜びと共に苦勞したい」、「その喜びに理由を与えるのが指導者」の言葉だ・・・という。

日本の政治家たちの言葉はあまりに空疎だ。

野村語録に「漫然と打席に入るな。『どうするか』を考えないヤツに『どうなるか』は見えないんだ」があるけれど、未来を見すえ、しかと考える能力を持つということだろう。

「それは、無理なのかもしれない」と改めて思った。

### ▼2021年3月13日：東北忌十年

春先の日射しに誘われて近郊低山富神山に足慣らし。

この時節に登るのは初めてだがさすがに駐車場までの車道の法面は残雪が山のように。登山道入口付近は雪が残り軽装では無理かなと思っただがその先は残雪も無く日差しは暖かくまずまず。ただ残雪の上を渡ってくる風は冷たく不慮なく春まだ先と感じられ、期待した春の芽吹きや花たちはまだまだまだという印象。

山頂には6、7人程度の先客がおり連れ合いと私が到着した頃にちょうど震災の時間の午後2時46分頃。東方向の先にある震災地に想いを馳せて黙禱を捧げた。道すがら頭の中で短歌（即詠）を練りながらの下山となった。

東北忌十年の日の山頂の二時四十六分黙禱の時刻とき

## ▼2021年1月18日：県知事選、県議補選で思うこと

投票日は24日。地方の首長や議員が職務を続けるのは3期で十分と思う。職務をビジネスでのプロジェクトと考えれば「PDCAサイクル」に似ている。1期目4年はP（計画）期、2期目の4年はD（実行）期、3期目の4年はC（評価・検証）期、そしてA（改善）は次の知事や議員に託す。今回の知事選の対立候補は「12年やって出来ないことはこれからの4年で出来るはずはない。だから私がやります」と語っていた。上記の考えに似ているとも言える。

県議補選の候補者の一人の公約に初めて目にする項目があり、これまでの弊持論を代弁する内容で面白いと思ったので紹介する。その他は弊持論（これまでのコラムでも4度取上げている。2019年10月19日付け掲載「大石田町議選定数割れ」を）参照ください。

・少なくとも地方議員は生業にすべきではない。

・そのためには4年の活動を終えたら前の職業に戻るしくみが必要（極端な例えで言えば現裁判制度のような発想が参考）

今回の県議補選の候補者（会社役員）の一人のユニークな公約&コメントで、当地で初めて目にする記述に出会った。

「2年限り 責任を持って目指せボランティア議員」／「私は商人 職業議員では有りません」

## ▼2021年1月7日：五木寛之の論考（大晦日の地方紙に掲載）を読む

大晦日の地方紙に紙面の半分弱のスペースを割いて首件論考が掲載されていた。見出しは・・・成長は限界「下山の時

代(＊)」、「ゆっくり成熟の喜び感じる」。＊：氏の著書

「下山の思想」が詳しい。

氏の「成長は限界」という表現に私の次のアクティビティを思い起こした。それは主宰する「One Coin 地域力カフェ」の今から11年前開催のスペシャルバージョン「やまがた地域力共創【論・楽・会】」の【論】での車座会議。テーマは『成長戦略の呪縛からフリーになるために・・・』「ロカールスタンダード (L S) 」の可能性を語る』

「成長戦略の限界」について参加者を交え熱く語り合い次のように「まとめ」た。

・・・最近見聞きする次のような小さな「試み」の積み重ねが「ロカールスタンダード (L S) 」下のパラダイム(枠組

み)の広がりにより効果が有るのでは・・・。

非効率の再評価／減速生活者(ダウンシフターズ)／幸せの尺度(価値観の変容)／各種シェアリングの取組み(ワーク・ルーム・カー・・・)／地産地消・在来食物の発掘／ダウンサイジング／新しい公共／行政の試み(秋田スベック・・・狭義のL Sの例?)

## ▼2020年8月21日：山形にも第3波が・・・

第3波で山形の感染確認者も桁違いの数値になってきた(今年の2月に当方が想定した状況に)。

県職員まで感染確認者が発生して(症状が出ているのに勤務していたらしくその認識の甘さで)たしかTVニュースで担当部局が謝罪?会見するシーンがあったはず。

ワクチンと治療薬が安全を担保されて行き渡り季節性インフルエンザと同じ様にならない限り終息はしないとベシミストは思うのだが・・・。英国でワクチンの投与が始まる報道を見聞きする。が、既定の安全性確認のステップを踏まずにトライして結果が「吉」とであれば良いが・・・最低あと1年は辛抱する必要があるのではと思っている。

日本の為政者の経済回復のための「G o t o」のトライ&エラー?は仕方がないと思うが、現状のように二兎を追うのは明らかに間違っていると思う。どうしても「G o t o」をとというならPCR検査(国の負担\*)で陰性確認できた者が参加OKになる様なスキームを何故考えないのか不思議。

＊：キャンセル料に使う税金で賄えるか検討する気力は持ち合わせていないが・・・。

## ▼2020年8月21日：任命権の意味を考えてみた

いま、メディアを賑わす日本学術会議の任命が話題になっているが日頃関心が向いていない領域のためかTV報道ではなかなか理解が及ばないため少し調べてみたところ次のように例を含めて並べてみると分かり易いと思った。

1. 日本学術会議…日本学術会議は、内閣総理大臣の管轄で国費で運営されており憲法23条の「学問の自由」によって保障された「政府の影響を受けない独立した組織」とある。
2. 日本学術会議会員の任命…会員の任命権者は総理大臣ですが、これはあくまでも形式的なもので、総理大臣は会議が推薦した会員候補105人を黙って承認することしかできないという説明がなされていてそれが「形式的な任命」の内容と思える。
3. 「形式的な任命権」の分かりやすい例…総理大臣の任命の手順…
  - ①総理大臣の選出は初めに自民党内で総裁選が行なわれて総裁に選ばれる（自民党の代表）
  - ②国会で首班指名選挙が行なわれ最近では自民党の総裁が選出されている（まだ「国会の代表」）
  - ③憲法第9条に基づき、任命権を持つ天皇より総理大臣を任命されて初めて日本の総理大臣となる。↓これも「形式的な任命権」であり天皇は「NO」と言うことはできない。どんなに気に入らない相手でも、首班指名選挙によって選出された人物は任命するしかない。

4. 今回、菅首相がやったことの意味…過去の例で言えば、前回の首班指名選挙によって選出された安倍晋三に対して、天皇が「安倍晋三は日本にとって百害あって一利なし」と仮にも判断して総理大臣の任命を拒否するということと同義ではないのかという考えに至る。

## ▼2020年8月21日：電気メーター取替

本日AMに電気メーター取替のお知らせ（添付）を持参の工事業者の訪問を受けた。東北電力ネットワーク

ク(株)から発注された工事会社で希望の工事日を聞くための訪問だったようだ。

東北電力ネットワーク(株)って何？と尋ねたら東北電力(株)から変わったとしか説明されず、東北電力ネットワーク(株)って何？という疑問もあり後ほどこちらから連絡するとしてお帰りたいだいた。

その後Web検索したところ2020-4-1から東北電力の一般送電部門を切り離して分社化し東北電力ネットワーク(株)として業務開始したことが分かった。

これまでその情報を見聞きした記憶がなかったので架電で問合せして折り返しの返事で東北電力↓東北電力ネットワーク↓委託工事会社の流れと理解できた。

そもそも「東北電力の一般送電部門の切り離し」の広報・告知がどのようにされていたか尋ねたところ添付写真(R2

年1月分の電気ご使用量のお知らせの「裏」で知らせているだけと東北電力ネットワーク(株)山形電力センターの総務の女性には事前の広報不足を頻りに恐縮しつつ上層部へ報告しますという回答だった。

何れにしても親方日の丸企業的仕事の流れは変わらないなぐとの印象を持った。資料をゆっくり読めば電気関係法令「計量法で一定期間での交換」が必要(水道メータなどと同様)でありその一環の工事と理解が出来た。委託工事会社の訪問者にはしっかりとした説明と受け答えをしてもらえたらとも思うのだが・・・お陰で電力会社の置かれた背景や業務のやり様(進め方)を改めて考えるきっかけになった。

その後27日のAMに取替工事が終わった。今回からスマート検針機能が付くことになり従来の人による検針業務が無くなるとのこと。また一つ「仕事の種」が消えるということになるようだ。

技術革新で便利になるのは良いこととは思いますが・・・5月19日の投稿「新しい生活様式は新しいのだろうか?」の中で「過ぎたる便利は不便利を生む」と記したことを思い出す。

AI時代と喧伝されビジネスチャンスと競い合う昨今だが生きるための「仕事」の将来像に目を向けず徒にのめり込む姿を心配するのは余計な(年寄りの)お世話と言われそう・・・しかし、これからの若い人たちの「行く末」に関わることだということをお忘れしないで欲しいと思うがこれもまた余計なお世話かもしれない。

## ▼2020年8月16日: 拘って 敗戦“記念日”(8月15日)

8月15日の地方紙の一面に「終戦75年・・・」という表現。ここ何年と「敗戦」という言い方のメディアは皆無なのではないだろうか? 8年前のこの当コラムでも「敗戦記念日(敗戦忌または終戦記念日)」というタイトルで取上げたことがある。

今回は思うところを次のように詠んだ(即詠)。

言い換えて七十五年敗戦は終戦となり記憶薄れゆく

また、夜9時からのNHKスペシャルは「失われた戦後補償」を見た。重たい内容のドキュメントで主に民間人の補償を取上げていた。NHKのドキュメントは良い作品を手掛けることが多いと思つた。

▼2020年7月20日：今夜のEテレ「100分de名著」は吉本隆明の「共同幻想論」第3回

「100分de名著」は取上げられる内容により時折見ているが今回のテーマは録画してゆっくり視聴している。案内役の一人伊集院光のコメントでこの番組が分かり易い仕立てになっっているように思う。

当方の吉本の著書との出会いは1967年頃（たしか大学2年生となり米沢に下宿を始めた頃）の「吉本隆明詩集」が最初であった。何度も読み返しているため今では擦り切れそうになっている吉本隆明詩集（思想社）の中から、わたしにとつての吉本の原点と思っっている「恋唄」を以下に書き写す。

恋唄

理由もなくかなしかったとききみは愛することを知るので夕ぐれにきて夕ぐれに帰ってゆく人のために

きみは足枷となった運命をにくむのだ  
その日のうちに

もし優しさが別の優しさにかわり明日のことが思いしられなかったら

きみは愛肉を信ずるのだ 恋はいつか

他人の血のなかで浅黄いろの屍衣のように安らかになる  
きみは炉辺で死にうるか  
その人の肩から世界は膨大な黄昏となって見え

願いにみちた声から  
落日はしたたりおちる

因みに、敬遠されがちの氏の著書では『吉本隆明「食」を語る 朝日文庫』は食をテーマとしてとつきやすいと思っうので紹介したい。

▼2020年6月22日：藤原正彦著「国家の品格」を久しぶりに再読中

大分前になるが拙コラム（アーカイブス…2013. 10. 26付け）の中で次のように氏の著書に触れたことがある。

\*「真の国際人には外国語は関係ない」「国語、読書などによる総合力」と言い切った「国家の品格」の著者藤原正彦の言葉が重たい。

\*因みに当方の経験を紹介する。

♪エンジニアリング企業入社間もない頃に会社での就業前の英会話教室で「日本の結婚式で女性が身にする『角隠し』と『綿帽子』の違いを知っていますか」と問われ誰一人答える

ことが出来なかつた。

♪海外現場（たしかクウエート）でのたまのパーティで欧米などのエンジニアから日本の歌舞伎、文楽、狂言などについて問われて窮したことがある。日本語ですら語ることが難しいことを英語でなど出来ないのは明らか。

また、次のような短歌を詠んだことがある当方には氏の冊子（国家の品格）の最後の項「世界を救うのは日本人（\*）」で記している論考に共感を覚える。

連鎖する世界のテロの終焉は神にフリーな国が鍵握る

\*…次のように記しているので転記する。

日本は、金銭至上主義を何とも思わない野卑な国々とは、一線を画す必要があります。国家の品格をひたすら守ることで。経済的斜陽が一世紀ほど続こうと、孤高を保つべきだと思います。たかが経済なのです。大正末期から昭和の初めにかけて駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クローデルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和十八年に、パリでこう言いました。

「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」

日本人一人一人が美しい情緒と形を身につけ、品格ある国家を保つことは、日本人として生まれた真の意味であり、人類への責務と思うのです。ここ四世紀間ほど世界を支配した欧米の教義は、ようやく破綻を見せ始めました。世界は途方に暮れています。時間はかかりますが、この世界を本格的に救えるのは、日本人しかいないと私は思うのです。

この考えは司馬遼太郎の「名こそ惜しけれ」という視点にも通じるように感じるのは当方の勝手であろうか？

### ▼2020年6月17日…「地上イージス計画停止」という地 方紙のトップ記事

6月16日の地方紙のトップは「地上イージス計画停止」。この記事の中で目に付いたのは「この計画の費用は維持運用費を含め約4500億円の見通しで、これまで調査費など約1800億円分が契約されている。」という記載。この日の社説もこれを受けて「完全に撤回し検証せよ」というタイトルの論説であったがこの中ではこの費用については一切触れられていない。また、論説の幾つかの指摘はもろろん



大切なことではあるが当方が気になったのは次のようなことであり地方紙と言えども論じて欲しい（当方の記憶の限りでは見ていない）と思ったこと。Webで調べれば一個人でも辿りつけるのかもしれないが税金を納めている一国民としてはメディアがそれらを調査して報道する責任があると思うのだが・・・。

・この米国との契約がどのようになっているか

・中止となった場合にはこれまで発生した費用に加えて発生するであろう違約金はどうか

・ことここに至った責任の究明

## ▼2020年6月10日：高齢多老化社会から「多死社会（または多死時代）」へ

これまでも当コラムや主宰する地域活動（One Coin 地域カカフェやFMラジオ番組）などで多老化社会の状況や問題などに触れてきたが今日初めて「多死社会（または多死時代）」というキーワードを目にした。多死社会（または他死時代）とは、高齢化社会の次に訪れるであろうと想定されている社会の形態であり、人口の大部分を占めている高齢者が

平均寿命などといった死亡する可能性の高い年齢に達すると共に死亡していき人口が減少していくであろうという時期とウィキペディアに書かれている。

このキーワードは本日の地方紙の連載コーナー「最後のときと向き合う 訪問診療医の15年」の最終回（12回）の中に見つけたので一部を転記紹介する。

・・・2025年に団塊世代全員が75歳以上の後期高齢者となり、日本は「多死時代を迎える」。今後、じっくり時間をかけて患者や家族に心を寄せる在宅みとりは困難になっていき、「死のオートメーション化」が進むと予測する・・・

この医師は40年にわたる外科医時代を経て、訪問診療を初めて15年、82歳の今も在宅医療の第一線で患者に向き合っているという小堀医師。次の言葉が心に残る。

・「死は『普遍的』という言葉が介入する余地のない世界である。」  
・一つとして同じ死はない。なぜなら、一つとして同じ人生はないのだから。

## ▼2020年6月4日：9月入学は本当にグローバルスタンダードか？

コロナ禍の最中に急浮上した9月入学は見送りになったようだ。それはそれとして賛成派の国会議員、有識者たち更にはメディアが口を揃えているグローバルスタンダード（和製英語）は本当に世界標準（\*）なのだろうか？

\*…「国際標準」や「世界標準」の意味であれば、英語では「International standard」（インターナショナルスタンダード）と言うようだ。

因みに技術の分野ではISOが世界に通用することで良く知られていてISO9001（品質）やISO14001（環境）などは一般に知られている。

世界の小中高校の入学式が何月なのか調べてみたら次のような情報を見つけた（メディアもせめてこのような情報も示して報道をして欲しいものだ）。これを見る限り夫々の国の歴史や季節やその他の事情でまちまちであるように思われる。やはり、日本が現状（4月）になっている理由や経緯を含めそれぞれのメリットデメリットを証左を含めてしっかり検討することが大事と思う。

一部の人達の恣意的な発言に惑わされず、一番影響を被るのは常に「現場」ということを忘れずにいたいと思う。

1月…シンガポール、マレーシア、フィジー 2月…オーストラリア、ニュージーランド、ブラジル 3月…韓国、アルゼンチン、ペルー、チリ 4月…日本、インド、パキスタン、パナマ 5月…タイ 6月…フィリピン、ミャンマー 7月…インドネシア 8月…ドイツ、スイス、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、台湾 9月…アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ロシア、カナダ、中国、ベトナム 10月…エジプト、ナイジェリア、セネガル、カンボジア

## ▼2020年5月30日：専門家会議 政府、議事録作らず

記憶ではコロナ禍が始まった頃にも同様の掲載記事があったと思うが・・・これではそれ以降全く改善されていないことになる。首相官邸のWebサイトには第6回までの議事概要と資料は公開されているが、どのメンバーがどのような発言をしたかは分からないと記載されていた。つまり3月以来これまで開催された16回分の専門家会議の全ての議事録を作成していないという。

この政権は今回のコロナ禍を今後を活かすことを真剣に考えるつもりはないようだ。先に当コラム(2020年5月12日付け)で紹介した「危機管理は「儲ける」ためにすることではない。生き延びるためにすることである」、 「日本人は危機管理ができない」ということを与件として危機管理については考える必要がある」と語る内田樹氏の論考のよりに日本人の意識構造の典型としか言いようがない。

当方の身近な経験では大分前になるが山形県の男女共同参画審議会の委嘱で審議委員に2期4年間携わったことがある。その時でさえ事務局が作成した議事録案が送られてきて発言内容の修正を求めて反映されたことがある。「況や国の危機管理に関わる専門家会議をや」である。

▼2020年5月27日・5月26日の地方紙の片隅にある小記事【ニューヨーク共同】が気になった。

見出し… 歴史に記憶に刻む N.Y.タイムズ1面/コロナ死者1000人の名前



記事内容【ニューヨーク共同】(以下抜粋) …

・24日付けの1面に「米コロナ死者10万人に迫る 計りしれない損失」

・「彼らは単なるリストの上の名前ではない。彼らはわれわれだ・・・患者数だろうと、失業者数、数字だけでは新型コロナの影響を推し量ることはできない」

・死者それぞれに「厳しい仕事ぶりで知られる裁縫師」「30年以上にわたり数学と英語、歴史を教えた」など、人となりを紹介する説明を一言ずつ添えている。

この記事にふと本コラムのアーカイブスで紹介した「相模原殺傷事件 問われる社会の在り方」を思い出した。この時は「事件の犠牲者の氏名が公表されない」ことに対する5月25日掲載の最首 悟氏の論考を紹介して氏名公表の有り方に触れた。翻って我が国の今回のコロナ禍の報道で言えば感染確認者、死者数・・・その殆どが数字のみで扱われる現実があり、比較してこのN.Y.タイムズの記事は日本のメディアに対して一石を投じている。

## ▼2020年5月17日：新しい生活様式は新しいのだろうか？

かつて、「新しい判断」と言い約束を反故にしてもいいと公言した政治家がいた。また、この政治家の発言にはスピード感、しつかりと、着実に、あらゆる、大胆な、間髪をいれず、これまでにない、確実に・・・心に届きそうにもない言葉が並ぶ。

政治は言葉がすべてと誰かが言った。

14日に8都道府県以外の県の緊急事態宣言が解除され、それに先立つ5月4日に厚労省から「新しい生活様式」の要請とその具体例が出されこのところメディアを賑わすようになった。

技術の進化は止められないと思いつつ最近のAIを初めてする過ぎたる？自動化の礼賛は雇用を蝕み働くことの意味を改めて私たちに考え直すことを求めていると感じていた。

また、生活の利便さについても同様で弊持論「過ぎたる便利は不便利を生む」は言い過ぎかもしれないが私たちから生活の有りようを考える余裕を次第に奪っているのではないか

と思うようになっていた。そのような中で3・11の後に続いている地震、台風、豪雨などの自然災害に続いて今回の新型コロナウイルス禍である。拙い詠草ではあるが次のように詠んだことを思い出す。

天災に人災加わる3.11 人災に人災重なるCOVID-19

これまで慎ましく身の丈に合った生活で充分と勝手な考えでいた身には何をいまさら生活様式の変更？・・・という想いも募り、治療薬やワクチンができた暁にはまた元の生活様式に戻るのでは・・・とも思ったりしてしまう。そもそも20年前にUターンして以来、世界の流れの中心を占める経済成長戦略に疑問を持っていた。

約10年前の平成22年度2月に主宰する地域活動の集まり(One Coin 地域カフェ)で「成熟・縮小社会(又は低成長社会)」について参加者と話し合ったことを思い出す。

## ▼2020年5月12日：思想家 内田 樹氏の掲載記事に「腑に落ちた」 感覚を味わえた

5月9日の地方紙の「新型コロナと文明」という掲載コーナーに思想家内田 樹氏の投稿「最悪の想定嫌う日本 いず

れは国の命取りに」という見出しの投稿を読み、喉に魚の小骨が刺さったように最近気になっていたことが消え「腑に落ちる」感覚を久しぶりに味わうことができたので紹介したい。

内田氏は思想家、文芸評論家で武道家でもある論客として知られ、以前「街場の教育論」という著書を読んだことがあり当時教育現場にいた短歌の先達（弊師匠の一人）に紹介がてら話したことがある。今回の投稿は紙面の半分を占める内容でそのことから地方紙としても力を入れたことが窺える。

氏は「危機管理」という切り口に沿いながら日本人、日本社会の特性を分析しその克服の可能性について論じており次の当方の懸案事項にも答えを見つけることができ得心するに十分な内容となっていた。

「世界が成熟社会（または低成長、減少社会）に向かうという論調が増える中で保守、革新または与党、野党を問わず日本の為政者が何故経済成長という錦の御旗にここまで固執するのか不思議に思えてこれまでも当コラムでも何度か話題にしてきたが得心に至っていない」

少し長くなるが記載内容のサブ見出しを紹介しながら氏の論点・論旨の一部を転記することお許し願いたい。

\*序…

・危機管理というのは、「最も明るい見通し」から「最悪の事態」まで何種類かの未来について、それに対応するシナリオを用意しておくことである。どれかのシナリオが「当たる」とそれ以外のシナリオは「外れる」。そのための準備はすべて無駄になる。そういう「無駄」が嫌だという人は危機管理には向かない。

\*生き延びるため…

・危機管理は「儲ける」ためにすることではない。生き延びるためにすることである。

・例えば感染症用の医療機器や病床は感染症が流行する時以外は使えない。・・・「病床の稼働率を上げる。医療資源を無駄なく使え」とうるさく言い立てると（実際にそうしたわけだが）感染症用の資機材も病床も削減される。そして、いざパンデミックになると、ばたばたと人が死ぬ。

・そういう危機管理の基本がわかっていない人が日本では政策決定を行っている。

・先の戦争指導部がそうだった。・・・「希望的観測」だけで綴られた作戦を起案する参謀が重用され、「作戦が失敗した場合、被害を最小化するためにはどうしたらいいのか」というタイプの思考をする人間は嫌われた。

\* 「言霊」を信じる・・・

・「言霊の幸(さき)はふ国」においては、言葉には現実変能力が有るとみなされている。祝言を発すれば吉事が起こり、不吉な言葉を発すれば凶事が起こると信じられている。

・それゆえ、日本では「プランAがダメだったら」という仮定は「凶事を招く」不吉なふるまいとして排斥される。そんな国で危機管理が出来るはずが無い。

・そういう国民性なのである。経済が低迷してきたら、五輪だ、万博だ、カジノだ、リニアだ、クールジャパンだともに憑かれたようにわめき散らしていたのは、主観的には「祝言」をなしていたのである。・・・あれは「祈り」なの

である。「言霊の力」で現実を変成しようとしていたのである。

・「日本人は危機管理ができない」ということを与件として危機管理については考える必要がある。

・今回の新型コロナウイルスによるパンデミックでも、日本人は「感染は日本では広がらないだろう」という疫学的に無根拠なことを信じ、広言していたが、それを「嘘をついた」といふべきでない。あれは「言霊」だったのである。「感染は広がらないだろう」と言えば、その通りことが起きると信じて、善意で言い続けていたのである。

\* 同一のパターン・・・

・「東京五輪は予定通り開催される」も同じである。・・・「予定通り開催される」という祈りを、「開催しない」という決定が下るまで唱え続けるのが「日本流」なのである。

・同じ様に、感染拡大に備えて人工呼吸器や検査セットや病床を確保しなかったのは・・・「何の備えもする必要がなかった未来を」「予祝」によって招来しようとしていたのである。

・そうやって見直すと、今回のパンデミックにおける日本の失敗が同一のパターンを飽きずに繰り返していることがわかる。そろそろそのことに気づいてもいいのではないか。気付かなければ、同じことがこれからも繰り返されるし、いずれはそれがわが国の命取りになる。

### ▼2020年5月5日：10万人当たりの感染（確認）者数と死者数の報道

今朝の地方紙の新型コロナウイルスの感染（確認）者数の表の中に10万人当たりの感染（確認）者数と死者数の併記が初めて（と思う）なされていた。当方が弊コラムやFacebookでその必要性を指摘した4月24日から11日経過しているが、しかしまだ抜けているものがある。

一つ目は同じく3月16日に次のように指摘した母数としてのPCR検査数。

「母数（分母となる検査数）に対して発見された感染者数として評価されるべきであり単に感染者数の数だけに焦点をあてて語るべきではないと思う。」

二つ目は感染の広がり度を表わす陽性率。

表をみて判断する読者には関連する数値データを可能な限り表記する努力を期待したい。

また、緊急事態宣言が全国に拡大された4月16日からの「累積感染（確認）者数の増加率」が併記表示されていたがそれは何のための表記なのだろうか？

北海道、富山、鳥取、佐賀、鹿児島が100%、200%と断トツで飛びぬけている。対応力の差なのだろうか人々の外出自粛への協力度合いなのだろうか？

### ▼2020年5月5日：医療従事者用防護用具の不足が叫ばれて久しいが・・・

5日の朝のTVニュースでジャーニーズ事務所が医療従事者用防護用具の不足に対して8千万円の寄付をすると表明したところ多くの賛同者が出て3億3千万円となり、それらをJALの協力も得て入手できたので寄付すると発表する嵐のメンバー（相葉）が紹介されていた。

3. 11の時に学んだこと「誰もがそれぞれの立場で出来ることをすれば良い」の観点からすれば医療現場が助かる点で「いいね」を送りたい。売名行為として非難する向きもあ

ると聞くが・・・それは有名人（会社）ゆえでありメディアへの情報提供の仕方の問題なのかもしれない。また、一つの美談として済ませて良いのだろうか？と手放して喜べない複雑な気持ちにもなってしまう。

医療従事者用防護用具の不足が医療崩壊につながる要因の一つになると叫ばれて久しい。様々な方面での自作のフェースシールドや雨合羽の転用防護服などが製作されて供給されているというような報道も見聞きしながら外出自粛の高齢者はこのような民間の協力にも敬意もって見守っている。

それはそれとして、医療従事者用防護用具の不足がメディアを賑わすがそれに対処する為政者（国など）のアクション情報（何かはやっているのだろうか）がその実施内容やその結果（メディアなどあまり見聞きできないと感じるのは当方ひとりなのだろうか？もし対応策が取れないでいるならそれは何故なのだろうか？

民間人に出来て国が出来ないとすれば何か理由があるのであるのではとも思う。メディアにはその問題の原因を調べて上記の報道に併せて取上げて欲しいと思う。

## ▼2020年4月30日：コロナ禍でグローバル化と経済成長戦略のパラダイムは変わるのだろうか？

グローバル化が進む中米圏にトランプ大統領が誕生して以降に英国のECからの脱退やブラジルなど一部の国で自国第一主義が増え始めている。

この自国第一主義と経済成長一辺倒（至上主義？）の相関は不案内だが今回のコロナ禍により初動対策を誤ったと批判されるように今や感染確認者数が世界で最も多くなった米国のトランプ手法に陰りが見受けられる。

世界の資源の有限を見据えれば経済成長一辺倒の戦略に限界があり北欧の先進国の様な成熟・縮小社会（又は低成長社会）を前提とした政策の推進で、限られる資源を再生など有効活用ながら「慎ましく」進むしか道はないと思うのだが・・・日本をはじめとする世の為政者は経済成長という錦の御旗を降ろすことで自身の権力を失う恐怖から抜け出せないでいる。

グローバル化とそれを可能にした情報化技術の進化は止まらないし止められないだろうがこの度のコロナ禍はそれらの運用形態の変化を迫ることは間違いないと思う。



弊主宰の平成22年度第8回(2月) One Coin 地域力カフェス。ペシタルバージョン「やまがた地域力共創【論・楽(落)・会】」・・・成熟社会のいまだからこそ、私たちの新たな生き方・働き方を考えてみよう!!・・・において次の資料を準備して成熟社会について参加者と話し合っている。

\* 110215 「論」の資料・・・成長戦略の呪縛からフリーになるために 【ローカルスタンダード】の可能性を語る車座会議

9年前に既に話題提供して話し合っているがその後の社会の変化に違いはあるが今回のコロナ禍により世界のパラダイム(社会の枠組みや構造)の変容も避けられないしそのスピードも速まると思う。

## ▼2020年4月27日 地方紙の記事 Ⅱ 解決の見通し語れ足りぬ物資と「説明」Ⅱ

4月26日の地方紙の共同通信編集委員の署名入り記事のコーナーでコロナ禍の現状分析と課題を的確に表現されていて「胸のつかえが下りた」感がある。

久しぶりに紹介(以下、抜粋&転記)をしたい。

・新型コロナウイルス感染症についての記事を、軍事や戦争のアナロジー(類似)で書くことはできるだけ避けてきた。・・・だが最近、別の意味で戦争を思い起こすニュースが増えた。人や物資の不足に關してである。この国に太平洋戦争下のような「欲しがりません勝つまでは」の時代が再来している。

・例えばマスクはどうだ。政府は、各戸に配ったたった2枚を大事に使い、なんなら手作りしろと言

う。・・・「ぜいたくは敵だ」らしい。・・・石油が枯渇し、松の根の油で戦闘機を飛ばそうとしたことを思い起こさせる。

・医療現場では飛沫を遮る防護具が足りず雨がっぱの提供を呼びかけた市長がいた。・・・家庭の鍋や釜からお寺の釣り鐘まで、金属製品を供出させたことと印象が重なる。・・・「ものづくり大國」という触れ込み、既に砂上の楼閣になっていた。・・・

・官房長官は2月、マスクについて「週1億枚以上供給できる見通し」と述べた。あれはその後、どうなったのか。・・・ドイツが検査キットの増産、備蓄を始めたのは1月である。

・見通しについてネガティブな情報も包み隠さず語り、その解決に当たる政策遂行の決意と見通しを語ること、それへの疑問、批判に一つ一つ答えていくことが、リスクコミュニケーションだ。

・公文書を改ざんしてまで政権を擁護するのが現下の官僚だ。・・・

・ウイルスは付度とは無縁だ。一強と評される長期政権であっても遠慮はせず、倒れるまで猛威を振うかもしれない。

▼2020年4月24日：PCR検査数は10万人当たりの検査数で比較し、その上で「陽性率」を考えたい

今日24日の地方紙に次のような二つの見出しの記事があった。

・「少ない検査数 識者が警鐘 「陽性率」 高く感染爆発見逃す恐れ」

・「東北6県のPCR検査状況（1/15〜4/21）」のグラフの掲載そして本県の陽性率3.9%

ちよっと遅くはないか？いまさら・・・の印象を持ってしまうのは当方だけのだろうか？

数値の表現はその母数を抜きに語るべきでないことは3月16日の弊コラムで触れた。また、新型コロナの場合は未発症者（無症状）がウイルス（生物ではなく何層もの脂質（脂肪）でできた保護膜に覆われたたんぱく質分子DNAである）を出すことは前に紹介した。

東北で検査数が一番の本県の陽性率は3.9%。検査数が最小（山形県の約1/7）の岩手県は感染者が0（当然陽性率も0）であるが検査数を増やせばその保証は無いと考えるべきと思う。

当山形県でも更に検査数を増やせば陽性率が変わるのとは明らか。やはり、都道府県の検査体制・姿勢を表わす「人口10万人当たりのPCR検査数」も表示して他の都道府県の現状との比較で論じる必要性を強く感じる。

▼2020年4月15日：「方向性を持って検討する」の発言の意味

昨夕のかつて、否、今も「前向きに検討する」が話題になったことがあり「ほぼ検討しない」という意味であることが当たり前になって久しい。15日のTV報道を見て違和感を覚えたのは私だけだろうか？

NHKも民間も、新聞各社もただその言葉を伝えたただけで政治家の発言の曖昧さ、責任の所在の無さを指摘する論評は調べた限り見つからなかった。

政治家は発する言葉に政治生命がかかっている位に大事というような考えを提示した識者がいたがこの識者からすれば言葉として論ずるに値しないということで論評が無いのだからと当方には思える。

14日にこのコラムで公式ツイッターの炎上について触れたがこの発言の仕方はこの国のトップがOut of Controlの状態になって示していることを示しているように思えてならない。

## ▼2020年4月14日：安倍首相の公式ツイッターの炎上

昨夕のTV報道で芸能人の自宅で身体を動かそうという歌の呼びかけ映像にツイートして愛犬？と紅茶で寛ぐ姿と「自宅待機をしよう」というメッセージの映像が紹介された。これを見て啞然として開いた口が塞がらなかった。

今、国の緊急事態宣言やそれを受けて奔走する都道府県の対応やそれらの影響で様々な場所で苦しみ、苦勞している国

民の意識を逆なでする危機意識ゼロを露呈する公式ツイッター！

さすがに取り巻きには止める人間がいなかったようで菅官房長官の「35万回の「いいね」が得られている」という会見を見せられて、権力と税金により収入を保障されている国のトップがこのような公式のツイッターを発信するようではこの政権は既にレームダックの段階になっていると感じた。

大分以前のコラム(2016年)「どんな世界を夢見るか ウルグアイ前大統領ムヒカ氏来日、幸福論展開」の記事について(一)を思い出した。

ウルグアイ前大統領ムヒカ氏が来日し幸福について語ったことを。たしか、自身の財産は古い車一台と話していた。詳細は忘れていたが早稲田？大学での講演も強く印象に残っている。時代のスピードは速いとは言え氏の一贯した思考に共感を覚え今のこの国の為政者たちにムヒカ氏の姿勢を思いだして欲しいと強く思う。当方の知る限りでは昨夕のそして今朝のNHKのTV報道ではこの件を一切取上げていなかったことを付け加えたい。

▼2020年4月6日：緊急事態宣言について

昼のTV番組やWebNewsなどで首相は6日、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、緊急事態宣言を発令する意向を固めたという次のような内容の報道がなされている。

政府は同日午後2時から「基本的対処方針等諮問委員会」を非公式に、午後6時すぎから新型コロナウイルス感染症対策本部をそれぞれ聞き準備に着手するようだ。対象は東京都など首都圏や大阪府などを軸に検討し、7日にも発令する。何処を対象とするか・・・素人なりに「発生感染者数vs人口」という切り口を考えてみたが如何だろうか？

数値を扱う際の基準としてしばしば母数が用いられる。感染者数が毎日のように示され更新され発表されるが検査数（母数）に対する数値として扱われることが少ないのが気になっていた。

因みに「発生感染者数（人）vs人口（万人）」で計算してみると次のようになる。緊急事態宣言の対象を決定する要素は様々あると思うがこの切り口も一つの指標になると思っただ次第。  
主だったところと南東北3県の数値を大きい順に並べてみる。

東京都…1033÷1395||0.74 大阪府…408÷882||0.46 千葉県…261÷628||0.42  
兵庫県…203÷547||0.37

愛知県…227÷755||0.3 神奈川県…264÷906||0.29 埼玉県…184÷734||0.25 山形県…13÷108||0.12 宮城県…23÷231||0.1 福島県…16÷185||0.09

▼2020年3月31日：“脚本の台詞の間合いに仕組まれて 際立つ沈黙饒舌凌ぐ”

首題の弊詠草は3月30日付け「やましん歌壇」の井上管子選に掲載された一首です。

かつてこのコラムに「TVドラマから見る脚本家二人の違いはどこにあるか」というタイトルで下記のような内容をアップした。その考えを短歌に詠んでみたらどのようなか・・・選者（歌人）の評価に耐えられるか・・・と試みとして一首詠んだわけだが掲載に至り何とかクリアできたようだ。

最近のTVドラマで次の二人のドラマを見る機会があった。

・山田太一の「よその歌わたしの唄」  
・橋田寿賀子の「なるようになるさ」

二人の脚本家の違いは

「何を表現するか、どのような問題提起をしているか」「見る側にどれだけ考えさせられるか」に尽きるところ。脚本家は手段としてのシナリオで表現する。

山田は作家でもあり、その作品に関心を持ってきたのでシナリオの作品も知っている。例えば、「早春スケッチブック」、「今朝の秋」などを読むと分かることだが、

・会話が長くない  
・会話と会話の間に「絶妙、微妙」とも言える【間】が設けられている

・ト書きからも脚本家の作品に対する考えや演技者への要望が読み取れる

シナリオ作品の読み手はそしてドラマになれば視聴者は必然的に「考えさせられる」ことになる。

一方、橋田の作品はしばしば出演したタレントや俳優の笑い話として「台詞が長くて苦勞する」などと紹介される。今回の「なるようになるさ」はこれまでの作品の手法と変わり映えしない（脚本家の考えをこの延々と続く台詞で語っている）ことが分かる。視聴者も考える暇もなく番組の流れに身を任せることになりストーリーの先が見えてしまいい、場面展開の面白みなどもあまり期待できない。「過ぎたるは猶（なお）及ばざるが如し」の好例ではないかと思える。

今朝のNHKTVあさイチでスマホ5Gを取上げていた。

専門家も参加して番組が高速大容量・超低遅延・多数接続を売りにした時代の到来！とそのメリットの紹介ばかりだなくと思っていいたら視聴者からのメールのコメントで「メリットばかりでなくデメリットも！」が紹介された。

専門家に振られこの専門家は若干嫌な顔？をしながら「電磁波の健康への影響などの指摘もあり以前から話題になっているが問題は無いと思う」と答えており何んどのを得ない回答！ではないかと感じた。

確にかかつて携帯やIHの始めた頃に話題になったと記憶しているがその後はその普及が進み当たり前になっていくにつれ殆ど取上げられなくなった。

コメントした人はそのような答えを期待したのでは無く例えれば5Gの普及の中で懸念される運用に潜むリスクなどを取上げて欲しかったのではないかと推察した。

例えば素人の当方でも次のようになりスクなどを思いつくが・・・。

1. セキュリティ

2. 個人情報情報の国家管理（中国の例）

未だガラ携ユーザーの連れ合いに本当にこのような物（システム）の必要は有るのだろうか？と問われ、技術の進化は止められないのでそれを使う側のしくみ（制度、運用）の問題を論じる必要があると答えた。

別の言い方をすると「過ぎたる便利さは不便さを伴う」ことを肝に銘じるべきと言える。

AIなどですることが少なくなったら人は一体何に生きがいを持って生きるのか・・・。

### ▼2020年3月28日：外出自粛の報道関連に温度差

27日夕方の民放TVの国会予算委員会の映像で安倍明恵首相夫人の観桜の写真がSNSで炎上していると取上げられ、安倍首相の苦々しい貌の答弁様様が映っていた。

NHKの関連ニュースではどうかと見ていたが今日までに放映されてはいないように思えたので“なるほど”という感想を持ったが念のためWEB調査したらNHKのNEWS WEBでは取上げられていた。また、当方が読んでいる地方紙には28日に小さく取上げられていた。

これに限らずこれまでも数々の話題を提供している懲りない夫人なので今更言うべくもないが・・・夫婦間での共通認識がなされていない典型という観点で自らの心に留めたいと思った。

少なくとも騒動が始まった直後から当コラムで今回のウイルスの感染がこれまでの例と大きく異なるといふ技術的情報を基に、杞憂であって欲しいと願いつつ感染拡大の可能性を指摘して自らもそれなりの自粛をしてきたつもりだが・・・世界の感染拡大（パンデミック）の様相が日本にも及びそうな気配を感じる。

### ▼2020年3月19日：COVID-19感染者数の評価（真偽）を思っ

かつてこのコラムで何度か数値の評価に関連して次のような事案を書いた。

「NHK」報道への反応「食品の放射線汚染のサンプリング手法」／再び数字の扱いについて（福島原発による子供の甲状腺がん調査）／海外派遣自衛官の自殺54人の記事と数値の扱いについて

その内容は拙著及びそのデジタルブック「続 私的アンソロジー」＼しあわせの構図＼を参照されたい。

単に理工系の発想の性と言いきれない問題が潜んでいると思われ首件の報道を見て感じることを記す。

COVID-19については5度ほど当コラムで触れており今回で6度目となるが現時点で山形県は感染者が発見されていない7県の一つとなっている。

そもそも感染者数はその検査実施数と併せて発表され、評価されるべきと思う。つまり母数（分母となる検査数）に対して発見された感染者数として評価されるべきであり単に感染者数の数のみに焦点をあてて語るべきではないと思う。

山形県も検査数が増やせば（昨日で百数十件との報道）感染者がいらないとは言いい切れず感染者数がいらないと安心してはいられない。

先日のTV報道で確か和歌山県は国（厚労省）の検査に対する指針？基づかないで独自の判断で検査指針と実施体制で行う（検査数を増やす）と表明していた。また、以前首相の独断で小中高の休校措置の要請があった際に島根県知事は感染者が出た時点で実施すると表明したことを思いだした（島根県も感染者が発見されていない7県の一つ）。

何れも根拠が乏しい国（厚労省）の要請に異を唱えた貴重なアクションだと考えたい。

### ▼2020年3月13日：感染防止にインシアティブを取れなかったWHOが漸くパンデミックと発表

COVID-19関連の情報が始まった2月の10日前後に素人なりに今回の新型コロナウイルスとこれまでのウイルスとの主な違いを次のようにピックアップして情報交換する知人に伝えながら2月20日には本日（3月13日）に開催を予定した主宰する地域活動の反省会、意見交換会@飲食店の中止を決めた。

①感染者は発症前（感染に気付いていない）にもウイルスを出す

②検査薬、検査体制、治療方法が確立されておらず感染者発見に時間を要する

③武漢が封鎖をする以前にも既にも多くの中国人、外国人や日本人が日本国内に入っている。

その間、メディアアの映像（チャーター便、ダイヤモンド・プリンセス号、屋形船、その他）での検疫官の防護服の様子、船内での検疫、検査作業、また感染者受入れの旅館や病院などでの状況・情報を見ていて防止技術のプロトコルが徹底されていない様に思えてこれでは感染が広がると懸念していた。

かつて勤務した企業で医薬品製造の工場や設備の設計・建設に携わったことがあり、原薬（取扱い量の桁が違うのでかなりの危険物）封じ込める「バイオ&ケミカルハザード防止技術」については一般の方よりは知見を保有しているつもりです。

その後の和歌山、沖縄、北海道・・・各地で感染の情報（院内感染も含む）を見ながら遅かれ早かれ山形にも・・・と思っていた。また、素人が入手できた情報では発生源中国が国家の威信を賭け権力を行使して封じ込め作業を進めたこと（具体的な作業の是非は別にして）や台湾などの対応、対策から日本をはじめ多くの国々が学ばなかったように思える。

更に約1カ月が過ぎ後ろ向きとも思えたWHOが漸く「パンデミック（世界的大流行）」を表明した。この間WHOが機能不全に陥っていてそれを避けるための「イニシアティブ」は殆ど取らなかったように見受けられるが・・・ここに至ってしまったえばその「封じ込め」の視点からは時すでに遅しと言え先が見通せない状況。

高齢者はひたすら普通のインフルエンザとの違い（上述COVID19の3つの特徴）を肝に銘じて冷静な行動&自衛をするしかない。

### ▼2020年2月26日：続・退廃する政治家（COVID-19で揺れる状況の中で）

11月24日にも「退廃する政治家・官僚」を記したがCOVID19で揺れる現在でも変わりなくむしろ際立っている。一例を挙げれば・・・

・新型コロナウイルス感染症対策本部会議（全閣僚がメンバー）に小泉環境相、羽生田文科相、森法相が地元後援会へのパーティー出席などで欠席。

・後手後手の対応を挽回すべく26日に「イベント自粛要請」、27日に「中高臨時休校要請」と専門家会議の協議の



先に行く決断を装うようなアクションの中で秋葉首相補佐官（衆院議宮城選出）が26日夜に出版記念パーティーを開催したとTVニュースや新聞で報じられた。

27日夜、首相官邸で記者団から秋葉氏の立食パーティー開催についての見解を問われ、「ご苦勞様」とだけ語った。当事者も、その責任の所在を指摘された国のトップの発言を待つまでも無く政権のガバナンスが完全に崩れており自浄作用など望むべくもない。

## ▼2020年2月24日：その後のCOVID-19感染の状況に思う

2月14日のコラムで「中国の失敗策から学べなかつた日本のCOVID-19」を記しているがそれから10日が経過し、初動のつまずきのリカバリー対策は後手後手となり影響が広がりつつある。

特に問題なのは22日の夜に厚労省大臣のグイヤモンド・プリンセス号からの下船者の中に感染の有無の検査が未実施の人がいたという発表には啞然としてしまった。

更に、船内で業務にあたっていた厚労省職員41人にウイルス検査を行うと発表した。このうちの1

部は、船内業務後に検査を受けないまま、元の職場に出動していたという。なんという怠慢、危機意識の欠如だろうか！！

検査、防疫に関するプロトコル（基準の手順書）が無いのか、否、不十分でもあるはず、あるいは充分としてもそれを順守する意識が欠落していたのか・・・論外と言える現実を見聞きして国家公務員の危機意識に啞然としてしまう。

検査、防疫に関するプロトコル（基準の手順書）が無いのか、否、不十分でもあるはず、あるいは充分としてもそれを順守する意識が欠落していたのか・・・論外と言える現実を見聞きして国家公務員の危機意識に啞然としてしまう。

東北や当方が住まう山形での感染者報道がまだ無いが何れは（時間の問題）と覚悟する必要があると思う。

## ▼2020年2月16日：COVID-19の地域活動への影響

新型コロナウイルスの報道がメディアを賑わし始めた。

3月13日に予定して会場を押さえていた「One Coin地域力カフェ」の反省会兼意見交換会の実施をどうするかコンソメンバーへメール配信で次のように相談をした(2月19日)。

このところのCOVID19報道に小心者の高齢者は行動先にも配慮しなければという感じを持ちつつあります  
が・・・お二人はどのような感想をお持ちですか？

まだ報道に挙がらない東北の地でも既に潜在感染者がいて  
もおかしくない(間違いない)状況にあると思います。

ご承知のようにポイントは

・ 検査薬、検査体制が十分に確立されておらず感染者発見が難しい

・ 感染者は発症前にもウイルスを出す

・ 武漢が封鎖をする以前にも多くの中国人、外国人や日本人が日本に入っている

当方はかつて勤務した日揮で医薬品製造の、工場や設備の設計・工事に関わったことがあり、原薬(扱う量が違うので危険物)封じ込め技術(ケミカル・バイオハザード防止技術)については一般人よりは知識を持っていると思っています。

メディアの映像で検疫官の防護服の様子や船内での検疫、

検査作業を見ていてそのプロトコル(基準の手順書)が徹底されていない様に見えこれでは感染が広がると懸念してしました。

その後和歌山、沖縄・・・各地で感染の情報(院内感染も含む)を見ながら遅かれ早かれ山形にも・・

・ と思っていました。

昨日の知事会見のニュースでは県内でも数人の感染検査を実施し、陰性だったという報道がありました。

3. 11の時の原子炉のメルトダウンと同じで専門家やメディアもある程度コントロールされているということ念頭に状況を見守る必要があるのかも知れませんね。

追記・メールでの協議の結果翌日(2月20日)見送ることになった。

## ▼2020年2月14日:中国の失敗策から学べなかった日本のCOVID19対策

新型コロナウイルス感染騒動に関してWHOも機能していないように慣れない関西弁風に言えば「何を今更・・・命

名 (COVID-19) してどうするんや、他にやることは無い  
いんか!」と言いたい最近の状況と言える。

メディアを賑わすニュースはこの国のリスクマネジメント  
ト力の無さを露呈しているように思える。しばしば刑事もの  
ドラマで見聞きするシーンで例えれば「初動捜査の誤り」に  
当たるのかもしれない。

簡単な(汎用)検査方法、その治療方法がまだ見つからな  
いこの感染症対策も同じように思えてならない。

水際対策に固執するあまりまた経済への影響を重視するあ  
まりなのだろう最初から大胆な対策を躊躇してきたこれまで  
の対処療法的対策の結果、昨日には「発症していない(＊)  
感染者が国内に数百人のレベルで存在する」という考えが専  
門家やメディアの見立て(3.11の時の例もあるのでであ  
り過信はできないが)が報じられていた。

＊このウイルスは発症していなくても感染者はウイルス  
を排出する(これまでのSARSのようなウイルスと異なる)  
と専門家が警鐘

当方をはじめ高齢者はますます外へ出る機会を失いつつあ  
る・・・。

▼2020年2月9日:地方紙に「肺炎よりインフル脅威 米  
死者1万2千人か」の記事

地方紙の「新型コロナウイルス」関連記事掲載ページの  
片隅に小さく首件の見出しで初めて掲載された(全国紙では  
8日の産経)。

Webサイトの情報では2月6日にこの内容が報じられて  
いて何故日本のメディアはこれを取上げないのかと疑問を呈  
していた。

記事では「米疾病対策センター(CDC)によると米国では  
インフルエンザが猛威を振っており、CDCは全米でこの冬  
に少なくとも2,200万人が感染し、1万2千人が死亡し  
たと推計している」と記されている。

米国のインフルエンザは中国の新型コロナとその規模は比  
べるべくもない。

インフルエンザは既に検査・治療方法が確立しているから取  
上げないのか・・・3.11の時にメルトダウンを報じなか  
った際と同じように政府のコントロール(?)なのか・・・  
米国政権へ配慮する政府に付托しているのか・・・。

## ▼2020年2月9日：地方紙の地方紙の「談話室」に思う

欧州連合（EU）から英国の離脱協定承認を前に欧州委員長が述べた言葉を紹介していた。その言葉「別れの苦しさの中でのみ、われわれは愛の深さを見つめるのだ」は19世紀の作家ジョージ・エリオットの言葉を取り込んでいるとのこと。

英国の政治家が「われわれはEUが嫌いなのだ」という方言に対してその懐の深さは際立っていると紹介している。また、「知者惑わず、仁者は憂えず、勇者は懼れず」とかつて退陣する際に論語から引用して述べた宮沢喜一元首相の言葉にも触れている。

そして、翻って今般の国会の質疑での与党側（安倍首相）の答弁は含蓄どころか論戦以前の様相と危ぶむ。当方の好きな言葉（司馬遼太郎がその著書で述べている）「名こそ惜しけれ」の気概を持った政治家の出現が本場に望まれる。

## ▼2020年2月1日：NHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」を見た

録画したこの番組を見る機会があり妙に得心する箇所があったので下記したい。

第一人者と言われるこの方は「長谷川式」と呼ばれる早期診断の検査指標を開発、「痴呆」という呼称を「認知症」に変えるなど、人生を認知症医療に捧げてきた医師。

かつての先輩医師の言葉「君自身が認知症になって初めて君の研究は完成する」を胸に、自ら認知症であるという重い事実を公表したと紹介されていた。

「完成した研究は自身では活かすことができないが後に続く後輩たちに引き継がれる」ということと理解した。

この医師（長谷川先生）は研究時代に介護する家族の負担軽減のため「認知症患者のデイサービス利用」を提唱したとあり、自身も認知症になって本意ではなかった？ようだが娘さん、奥さんの勧めや二人の負担を考えデイサービスにトライした場面が紹介されていた。通所者と一緒になってゲーム（輪投げ？）をする（させられる）シーンとそこで身の置き所が無い表情をしている氏が映され、確か2、3日で中断した映像となっていた。

当方の推察では氏がかつて提唱した時のデイサービスの中味と現在の施設のサービスマスに違いが生じているか、或いは提

唱した当初から患者への視点が欠如していたことを暗に語っていたように思う。

認知症であろうとなかろうとしばしば施設のメニューやその紹介などで入所者みんなでの歌とか運動とか遊びをしているシーンを見る機会が多く、どうもやらされている感が強く・・・私は勘弁して欲しいといつも感じていた。

入所者の個々の希望に沿うようなサービスは施設運営の観点からは難しいのかもしれない。そのようなきめの細かいサービスを提供する施設の紹介をしている番組を見る機会もあり一度Web検索で調べたことがあるがその費用は当方など一般人からは手が届かないレベルのようだ。

6回目の年男でもある当方は幸いにもまだ介護施設などのお世話にならなくて済んでいるが、しばしば町内会で老人クラブや百歳体操などのお誘いを受ける。自身がやりたいことであるなら別として自身でやっている地域活動などで手いっぱいなので幸いにもこれらの勧誘を受ける機会は今のところない。

誰にも訪れる可能性があるが・・・できれば通り過ぎて欲しいものだ。

## ▼2020年1月5日：写真短歌等の「コラボ作品づくり」について

今日（1月5日）のNHKEETVの日曜美術館でファッションデザイナー・皆川明氏を取上げていた。もちろん初めて知るデザイナーで作品を見るのも初めて。

番組では次の様に紹介されていた

「ファストファッション全盛の今、流行にとらわれない独自の生地作りで注目されるデザイナー・皆川明。若い頃は長距離選手として活躍、魚市場でも働いた異色の経歴を持つ皆川は、服、絵画、さらには人生100年時代の幸せな生き方そのもののデザインを目指す。キャリア25周年を記念した大規模な展覧会から、異色のデザイナーの頭の中に迫る！」

特に共感を覚えたのは詩人谷川俊太郎とのコラボ絵本「はいくまないきもの」の紹介箇所で、皆川氏のデザインに谷川氏が詩？を付けた作品。昔風に言えば共同制作作品、今風に言えばコラボ作品。

当方が平成22年から短歌を嗜むようになって始めた「写真短歌」は「独りコラボ」と言える作品づくり。

短歌の世界でも俵万智が他人（プロ）の写真に短歌を添えた作品などの冊子を出してはいるが・・・自分の写真に自身の短歌を添えた写真短歌はあまり見かけない。

昨年11月にリニューアルした弊HPで「写真短歌」コーナーや、「写真短歌・写真俳句・その他投稿」コーナーに掲載している作品もその質を問わないとしてETVの番組で紹介した皆川氏×谷川氏のアクティビティと同じ領域と得心した。

## ▼2019年12月25日：「出生数 初の90万人割れ」という記事

地方紙の今日の1面、4面に記された次のような見出し&記事に「何を今更」という思いを強くした。

1面…出生数 初の初の90万人割れ 19年推計 人口自然減は最大・4面…背景に「非正規」増 改善へ雇用安定不可欠

本件やその関連事項については2017年6月に開始した当コラムでも何度か取上げており（13回/5年）見出しのみ挙げると次のようになる。

縮小社会と人口減少／子供の日の新聞記事「少子化歯止めかららず」に思うこと／「正社員の助成金増 継続」という記事は何かおかしくは無いか？／少子化への奇策inロシア／国がひとり親家庭と不妊治療を支援すると言うが・・・  
／首相ら発起人「子供の未来応援基金」寄付低調 まだ300万円！！／「潜在待機児童60万人」の意味／潜在待機児童6万人という続けているの記事について／新聞記事「離職ゼロ」鍵は職場に、介護休業制度見直し、余力ない中小、意識も問題／「待機児童ゼロの真実」という記事／「待機児童定義見直し」に思う／待機児童2年連続増／地方紙記事「待機児童ゼロ目標断念」から読み取れること

施策を色々打ってもその場限りという感が否めない。

原因とその関係性をクリアにしそれら原因を究明してそれらの解決策への対処なくして命題「出生率の向上」は望めな  
いと思う。

検討の甘さや誤解を恐れずに端折って言えば・・・

「若者の生活（就業）の安定↓結婚↓子供を持てる社会環境（例えば共働きができる社会環境）の整備↓出生率のアップ」ということだろうか・・・。

## ▼2019年11月25日：「桜を見る会」に関する新聞報道

12月4日のコラムに「退廃する為政者と官僚」というタイトルで投稿したがその後のこの件についてのTV、新聞などの報道を見てみると余りにも情けない内容でコメントをする気にもなれなかった。

が、しかし12月5日の地方紙に「破棄答弁時 データ残存」を官房長官が認めたという記事と「廃棄したのは障害者雇用の職員」と首相が国会で答弁したという記事には情けなさを通り越して呆れ果ててしまった。

責任を取ろうとしない政治家（政治屋？）とそれを支え続ける官僚にこの国の先行きはどうなるのかと暗澹たる思いになる。

国民のひとりひとりが政治的信条（与党or野党）は別にして道義的、倫理的観点から「それはおかしいだろう」と思えない、言えないとしたらそれこそ何かおかしいのではないだろうかと思ってしまう。

法制度が違うとはいえ（当方は全くの素人）隣国のように検察が入ったり、米国のように弾劾するような形にならない限り、弱者に責任転嫁をして（言い訳をして）居直っているようなこの国の為政者は無くならないのかも知れない。来た

れ！」「名こそ惜しけれ」の精神、倫理観を持った「気骨ある政治家」

## ▼2019年11月25日：地方紙の記事（佐伯啓思「英会話より国語力」）で思うこと

最近のメディアで大学入試改革の一環で英語の民間検定が問題になっておりそのことに対する識者（京大名誉教授）の意見が載っていた。そもそも小学校への英語、英会話の授業導入ということは大分前から取上げられていて多くの識者が反対しており当方の経験を踏まえても同様に反対（当方の言葉で言えば「英語より国語の“充実”である」。

「日本語で物事をまともに考えられない人間が英語で語れるはずがない」というのが持論です。

その根拠は当方の次のような経験から生まれている。当方が企業で働き始めた頃、就業時間前の企業内英会話で記憶に強く残っていることがある。外国人の先生から結婚式で女性が使用する「角かくし」と「綿帽子」の違いを問われ誰も応えることができなかった。そもそも日本語で考えても知らなかったことが理由。

ことほど左様に、歌舞伎、文楽・・・日本文化の大半の

内容について日本語でも語れないのが現実だった（今もあまり変わりがないが・・・）。

その後、海外の建設現場を幾つか経験する中、外国人を中心に時折開催されるパーティーでは仕事以外の話題は求められておらず話題に窮した経験が幾度もあった。

識者の例を挙げれば・・・藤原正彦の著書「国家の品格」の第6章なぜ「情緒と形が大事なのか」の③「国際人を育てる」で次のような項目で日本人の英語が触れられている。

「日本人の英語下手の理由」「外国語は関係ない」「外国語より読書を」

詳細は省くが氏の他の著書「日本人の矜持」などでも本テーマについて触れられている。次のように紹介されている著書なので参考にされたい。

「国家は将来ある子供たちの芽を摘もうとしている。英語早期教育、薄い国語教科書、愚かな平等教育、歪んだ個性の尊重・・・。真に身につけるべきは、読書による国語力、基礎の反復訓練による我慢力、儂いものの美を感得する感受性、歌う心、卑怯を憎む心。そして、大人たちは、カネと論

理を妄信するアメリカ化を避けねばならない。碩学賢者九名が我らが藤原先生と縦横無尽に語り合う。〜

### ▼2019年11月24日：退廃する為政者と官僚

桜を見る会の一連の報道を見て「為政者と官僚の退廃ぶり」に改めて「名こそ惜しけれ」への想いを強くした。参加者名簿の廃棄とその後に実施したとされる廃棄基準の変更はその「極み」と言える。

大西証史内閣審議官の発言「明恵夫人の推薦があった」旨の国会での発言のTV映像が唯一の救いか？

・・・官僚にも骨のある人も残っている！！・・・

### ▼2019年11月17日：東京五輪のマラソン・競歩会場変更の報道に見るメディアの怠慢

一連のゴタゴタの報道で一番気になったのがメディアの対応。振返ると「IOCが開催地を変更」という報道がなされて（10月16日）以降しばらくはどのTV局もこの決定に右往左往する関係者の報道だったという記憶があり噛み合わないIOCと東京都知事の考えが流されていた。



が、しばらくしてT.V局が「会場の決定権は五輪憲章でIOCが保有」と報じた。何だそうなのか・・・と当方も含め一般視聴者は思う。関係者やメディアであればIOCが何故一方的に札幌開催を発表できるのか調べれば分かったはず。分かっているのに報じなかった或は五輪憲章を調べもせず引張り続けたように見える怠慢は視聴者を弄んでいるとしか思えない。

そして「合意なき決定（11月1日）」までの約2週間、様々な水面下での駆け引きがなされたことは間違いない。

もう一つ気になるのはこの問題でのJOCの無力・無策ぶりと言える（かつての政財会の重鎮を擁しながら、いや、それゆえなのかも）。一方のラグビーワールドカップの盛り上がりと成果と比較すべくもないが・・・何とも情けない組織と言える。因みにゴタゴタの途中で当方が考えた問題解決の妙策は・・・札幌市の思惑（30年冬季五輪招致）を度外視した上で・・・「札幌市が『今からでは無理です』と辞退すること」でした。

## ▼2019年10月19日：地方紙の記事掲載の規準（社説と小さい囲み記事）

今日の社説のテーマは「プロ野球ドラフト指名 県勢3人の活躍に期待」。一方、「囲み記事」のテーマは「軽減税率のコスト」。

スポーツに関心が強い読者にとってはドラフトも気になるだろうがドラフトに関する記事はスポーツ面で結構紙面をさいておりそのページの「解説」でも充分のように当方は思うが・・・如何なものか。

10月以降消費税が10%になったことは仮に良しとしても公明党の強い要望で自民党を押し切ったとも言われる1年間という期間限定のこの軽減税率の施策には関係者（行政、小売業者、消費者など）がどれだけ振り回されているかメディアの報道を待つまでもない。

囲み記事に書かれている内容（軽減税率のコスト）の方こそ社説で扱うべきではないのかと二つの記事を同じ日に読むで感じた。

もし、別の日の社説に囲み記事で書いている内容を既に論じていたなら当方の意見は的を得ていないと認めざるを得ないが・・・これまでも何度かこの囲み記事コーナーについてコラムでも取上げてきたがどうも社説など大きなコーナーでは書けないこと（地方紙の本音）をこのコーナーで書いているのではと感じるのは当方のへそ曲りの感想なのだろうか？

## ▼2019年10月19日：大石田町議選 定数割れ

サブ見出しは「3回連続無投票も現実味」「なり手不足に対策求める声」。このコラムで地方議会議員選挙、議員のなり手不足という話題に触れるのは何回目になるのか・・・。

地方紙の2面のトップ記事ということもあり再度取上げる。当方が3度も取上げたように関係する情報は充分に有るはずであり地方紙と言えども問題と原因の究明、課題の抽出、メディアとして考える解決の方向性を提起できないのが残念。

記憶を辿れば最初に取上げたのは「20120903 TV番組「アカルイミライ」で知った町議員のあり方」。その後は「20140805 地方議員、議会のしくみについて思うこと」、  
「20160906 直言(地方紙のコラム記事)」と3度取上げた。3度目に論点をまとめてるので再録(以下)する。

「今、必要な叩き上げ派首相」というタイトルでの直言だが、サブタイトルの「弱者の生活 実感できぬ 世襲派」の方に関心を持った。国のトップや国会議員、地方の首長などは対象にはできないと思うが、地方議会、特に市町村レベルの議員は「生業」としない「しくみ」が必要ではないだろうか？このレベルでも生業とするから世襲が無くならないと言える。  
20160618日の地方紙の論説・解説へのコメントでも述べた

ようにボランティアの考え方を取り入れられない限り根本的解決には程遠いと思う(事例を下記に再録)。

当方のような一個人でも気付けるような気付きだがメディアであれば国内外の事例などの調査も十分可能と言えないか。

\*南木曾町議員の例(平成22年の情報)

- ・町議員の大半が「専業・生業」では無いこと。
- ・選挙に必要な供託金(一定の得票数に満たないと没収される)が不要ということ。
- ・町議会では、本会議約10日・委員会や町の行事へ出席を加えても年間約60日で、議員の報酬は月額14.3万円。
- ・全議員が他の本業(番組で取上げた議員(議長)はタクシー運転手)で生計を立てている。
- ・議員の殆どが担当プロジェクトを持ってその実現に注力している。
- ・定員割れが生じている

・若者・中堅のU・Iターンに呼びかけている 日本の町村議員あたりから変革が必要なのかもしれません。

\*海外の議員の例

・住民自治の考えが長年浸透してきたスイスでは住民の代表者が生業とは別に議員として夜間に議会に通う

・イギリス、フランス、スウェーデンなどでは地方議員は原則無給

▼2019年10月7日：わが師逝く

私の短歌の師であり短歌結社「黄雞」の運営委員長の阿部京子先生が10月5日に他界された。

先生は2014年に齋藤茂吉文化賞を受賞されておられやましん歌壇の選者を長年（08〜19年）務められている。

5年前のやましん歌壇への投稿がご縁でこれまでご指導をいただき黄雞（&山形支部）への入会するきっかけもいただいた。また、弊冊子「続 私的アンソロジー」しあわせの構図」の“発刊に寄せて”にも一文を頂戴している。

これからの私の短歌の歩みの標（錫杖）を亡くしたような喪失感が大きい。翌日に次のように詠んだ。

我もまた何れは果つる命なり

先逝くわが師を遠地で想う 合掌

▼2019年3月22日：『写真短歌常設コーナー開設@山形市立図書館』の地方紙記事掲載

先のコラムで紹介した当該展示については懇意の地方紙記者に取材を受けていたが嬉しいことに当方の誕生日の日に記事掲載となった。

自身の姿入りの記事は久しぶり。Uターン以降行政からの委託事業や地域活動などを取上げてもらう形で弊職務、氏名を含めた記事掲載は幾度かあったが個人のアクティビティに

ついて取上げられたのは初めてのことで。それがちょうど誕生日と重なり嬉しいプレゼントとなりました。



心身が許すなら遊行期入る歳（70歳）に短歌と写真短歌で構成する『続・続 私的アンソロジー』しあわせの構図「短歌・写真短歌篇」の発刊ができたなら良いなど夢想しています。

## ▼2018年7月7日：自費出版物の公的機関（図書館など）への寄贈

最近、歌集、句集、自分史などの自費出版物やその情報を目にする機会が多くなっている。しかし

それらを世の中へ公開、告知するツールも多くはなく自費出版物のデジタルブック化やその公開、告知も限定的のように思える。

その背景には下記のような日本の現状があるようだ。

「幸福度世界3位のアイスランドでは10人に1人が自叙伝（自分史）を書くそうです。本屋さん

には一般の人が書いた自叙伝が平積みになっていてか・・・因みに、日本は51位（先進国で最

下位）です。」

図書館などの公的機関のサポート体制も然りで、寄贈や受入れ冊子等の紹介も積極的に紹介しているようには思えない。当方も自費出版をして初めて図書館への問い合わせを試みて寄贈のしくみが用意されていることを知り、弊冊子（続私的アンソロジー）しあわせの構図」の寄贈をしたところ。

因みに、60歳の折に上梓したDVD版「私的アンソロジー」は自分史の一種と考えて見つけ出した「日本自分史センター」に問合せして寄贈した経験がある。今回の冊子の寄贈を思い立ち調べてみて図書館も寄贈を求めていることが分かったがそれを積極的に広報しているようには見られないと

いう印象を持った。今回の寄贈（県立図書館、市立図書館、日本自分史センター）、納本（国会図書館）を通じて得られた収獲として「図書館の貸出し蔵書の検索で自分が寄贈した冊子名を入力してみるとしっかりと記載がされていて貸出しが可能になっていたことを見つけ小さな喜びを味わうことができた」ことを挙げたい。もっと多くの方々が自費出版に興味を持ちこの世界が広がることを願いたい。

## ▼2018年5月10日：「内陸に及ぶ津波、東北」の公表が延期されていた！

国の地震調査研究推進本部（地震本部）が太平洋沿岸に襲来する危険のある大津波が東北地方の内陸まで到達するとの長期評価を3月11日の2日前に公表する予定だったという。元原子力規制委員（島崎氏）が東電の旧経営陣3人の第11回公判で証言。公表延期は地震本部事務局から自治体と電力会社に事前説明をしたので4月に延期したいとの連絡があり結果的に了承したという。（地震が起こり）「本来なら何人が助かった・・・」と自身を責めたという。

組織が関わる限りこのような事実はこの世界でも日常に発生していると言えるが・・・しかし、国、行政に携わる人は大方責任を取らないことが当たり前になっているが事の影響

の大きさと関係当事者には大きな責任があるはずだ。

▼2018年5月6日：高齢者免許返納 メディア(特にTV)の喧伝では？

「高齢者免許返納で地方の社会 崩壊？」というシンクタンクが政策見直し提言という小さい記事を見つけた。

高齢ドライバーに一律に運転免許自主返納を求める政策を見直し、都市部以外では免許継続を支援すべきだ」という提言をシンクタンク「北近畿地域連絡会議」が提言したという。その中には次のようなデータがありTVの喧伝には制度への忖度を感じてしまう。

交通事故総合分析センターデータでは2015年の免許人口1万人当たりの事故は65歳以上の高齢層58・8件で25歳～64歳の壮年層で56・7件と大差なく16歳～24歳の127・1件よりかなり少ないと指摘。当方は政策が出された後次のように詠んだ。

生活の脚の手立てを置き去りに免許返上ひとり歩きす

▼2018年3月10日：地方紙の特集 東日本大震災7年

震災7年という節目からか地方紙の一面を使って特集が組まれその見出しは次のように構成されていた。

①福島第1原発2号機 原子炉格納容器内部調査(イメージ)

②トリチウム水の扱いが課題に(2018年2月22日現在)

③各号機の状況、廃炉までの工程

④ようやく廃炉の足掛かり

⑤原発事故後、被災地の介護体制崩壊  
特に気になった点を以下に紹介する。

②…タンク貯蔵水約105万トン、うちトリチウム処理水(\*)85万トン、貯蔵容量約110万トン。

\*20万トンがトリチウムを含まないということか?また、今後貯蔵が可能な空き容量が5万トンという計算になる。トリチウムの処理技術が世界で確立されていないことには触れておらず課題とする中味が読者には示されていない。

③④…廃炉までの工程は偏に①のトリチウムの処理の可否及び溶融デブリの除去に掛かっておりこれらの課題が解決しないと③の行程はまさに「絵に描いた餅」となる。

⑤…三重苦(被爆、帰還困難、施設不足)に苦しむ高齢被災者の介護体制の崩壊はこの国の厳しい将来像を示していると思う。

▼2018年2月10日：地方紙のコラム記事「こんにち話」  
チエルノブイリ原発事故で調査 子供の臓器に影響

かつてこのコラムでも福島原発事故の子供たちの甲状腺が

んの調査に対する政府、県、メディアの対応について特に数値の扱い（特に母数）の誤りについて述べた。例えば2014.05.20 再び数字の扱いについて（福島原発による子供の甲状腺がん調査）で詳述。

今回の掲載記事はベラルーシのゴメリ医大の学長だった時代のチェルノブイリ原発事故調査を基に「汚染地区に住むこと、そこで栽培された農作物の購入はいけない」と講演し国会で報告して99年に刑務所に6年間収監され、後にフランスに移住しEUの支援の下イワンキフに研究センターを設立したユーリ・バンダジェフスキー氏への取材記事（共同通信社）。政府（為政者）は如何に安全性について隠蔽しようとしたかの実際が述べられているがわが国でも上記のように政府、県、メディアの対応に類似性が見られる。個と組織の間に横たわる「深い溝（乖離）」は世界共通であることが判る。

旧ソ連の憲法には「市民には健康保護の権利を持つ」という条文があったとのこと。日本国憲法でも同じ様な条文があり健康被害がでていてそれを隠しているなら憲法違反となるのではと言及。

だから、健康被害は無いと必死にデータの分析・評価でごまかしていると見られても仕方が無いと言える。

## ▼2018年1月16日 福島県 セシウム濃度検査結果が発表されたが・・・

第1原発事故後、県が沿岸海域で実施している魚介類の放

射セシウム濃度検査で2017年に採取した全ての検体が国の基準値を下回ったという記事。2016年に続いて2度目とある。結果操業自粛する海域も第1原発の半径20キロ圏内から10キロ圏内に縮小しようだ。

減少するのは望ましいことだが放出されている汚染水から除去出来ないトリチウムについて言及がなされないのは正直メディアの認識の甘さを禁じ得ない。

汚染水からトリチウムを除去出来る技術が今の世界に無いという現実を取上げ今後計画されている希釈しての放出すればセシウム以上の危険性を孕むことに言及できないことを、メディアの問題としてかつてこのコラムで何度も取上げているが今回も海洋汚染の改善にのみ言及する姿勢は問題だと思う。

## ▼2018年1月11日：宮本輝の「約束の冬」を読む

宮本の著作としては平成15年発行の作品を図書館より借りて読んだ。下巻にあった  
成程！と感じた文章を記す。

「不運な人も、幸運な人も、それを『運』ていうひとこととで片づけたりするけど、その運は、なにか人智でははかりしれんもんが分配したんやない・・・。やっぱり、その人が作り出したんやって思うねん。上原桂二郎が人に恵まれているという星のもとにあるのは、上原桂二郎

という人間の為せる業わざやねん・・・」

この著作で「雪迎え」に関する表現があり、発表後にその表現についてトラブルが生じて宮本がその誤りを認めて修正することを発表した記事を読んだことを覚えていた。

その折は著書を読む機会を逸していたが漸く機会を得た。雪迎えについては調べたりして覚えてたての短歌に次のように詠んだことがあるがどう推敲しても作品にならずそのままになっている。

冬浅し先人詠みし雪迎えこさき庭に我眼を凝らす

## ▼2017年12月26日：インスタ映え

地方紙のコラムのページの「時鐘」というコーナーに「インスタ映え」という記載記事があった。昨今「いいね」を求めてお金が動くのも当たり前のようだ。

フェイクニュース、ポストトゥルース・・・他者に認めてほしい欲求は政治家の奢りや劣化を助長し付度が蔓延りそれを追求しても解決出来ない今の政治には明るい先行きは期待できない。

短歌の世界に「社会詠」というジャンルがあり当方の稚拙な詠草から拾い出してみた。

・うつし世の虚栄の極みやフォロアーが売り買いされるインスタグラム

・今の世はフェイクニュースが飛び交ひて真贋見極む眼望

まん

・この時代ポスト・トゥルースと言われても昭和生まれはついでに行けぬ

この記事はオバマ大統領の離任演説から「民主主義はあなたたちを必要としている」を元氣の出る言葉として締めくくっているが・・・。

## ▼2017年11月25日：冊子「続私的アンソロジー」しあわせの構図」を発行

60歳で「【林住期】への羅針盤」として上梓した「D VD私的アンソロジー」に 続く形で、今般（11月）70歳を契機に「【遊行期】への羅針盤」と位置付け「続私的アンソロジー」しあわせの構図」を発行することとなりました。

いわゆる自分史の範疇ともいえませんが山形にUターンした以降の「マイプロジェクト」「写真」「短歌」「写真短歌」「HP掲載のコラム「飛耳長目」」「年譜」などで構成しております。

なお、「発行に寄せて」には社会に出てからこれまで約半世紀の様々なシーンでお付き合いとご指導

を賜った方々7名の方々から内容の未熟さを補って余りある言葉を頂戴しております。

ここに改めて謝意を表します。

著作・投稿・寄稿

幕末の科学思想 — 変革を準備したものとついでに科学への一考察 — (1970年週刊491第5号に投稿)

．．．正徳元年(1711)越後村上・安房北条・周防。同二年加賀大聖寺、同四年武蔵小金井、享保二年(1717)伯耆・因播・備後、同三年備後、同四年周防岩国、同五年紀伊、同十一年但馬生野・信濃上伊郡・越後東頸城、同十二年美作津山領、同十四年岩代伊達郡、同十七年伊予・出雲、同十八年飛騨高山・丹後加佐郡、江戸・伯耆の坪上山、同十九年伯耆・安芸・肥後、元文三年(1738)磐城岩手・但馬朝来郡、同四年但馬・因幡・美作勝北郡、寛保二年(1742)伊予砥部・肥前東松浦、延享三年(1746)磐城、同四年羽前・伊予大州、寛延二年(1749)幡州姫路・岩代安積郡・佐渡・岩代金曲、岩代伊達郡桑折・甲斐、同三年讃岐九龜・伊予大州、宝暦元年(1751)土佐佐川、同三年備後福山領、同四年筑後久留米・伊予西条・美濃郡上郡・大和十市郡、宝暦五年陸中・羽後・出雲広瀬・和泉．．．一揆統発。

天明七年(1787)米価騰貴。一部問屋・林仲間、会所を解散する。同八年幕府、御用達町人に対し拝借金の返納を命ず。寛政一年(1789)旗本・御家人の負債を減免・貸金会所を設

置・大阪米蔵の納宿を全廢。寛政二年旧里帰農令公布・米方御用達起る。寛政六年寛政元年施行の儉約令を十年延長。文化六年(1809)江戸の十組仲間の出金で三橋会所設立。同十年三橋会所経営の米立会所設立．．．。

元文四年(1739)ロシアスペインベルグ探検隊三陸海岸・房州沿岸に出没、日本船と交易。正徳元年(1711)千島列島の第一島を経略。明和五年(1768)エトロフ島をロシア領に編入。明和八年ロシア人ベニョウスキーよりロシアの日本侵略計画伝えられる。天明三年(1783)工藤平助「赤蝦夷国説考」を著す。同七年林子兵「海国兵談」を著す。寛政四年(1792)林子兵、処士横議の罪で処罪さる。同四年ロシア使節のラスマン根室へ来航。同八年イギリス人ブロートン室蘭へ来航。同九年ロシア人エトロフト島に上陸。享和三年(1803)アメリカ船長崎来航、文化一年(1804)ロシア使節レザノフ長崎へ来航．．．。

幕末、それは無類の絶対を誇った封建権力が、打ち続く飢饉と重税に喘ぐ百姓の蜂起の波、富を蓄えていった町人の抬頭、開国を迫る外敵の圧力、あるいは支配の權威の学を否定する事実志向の学問への情熱等によって、その根底から、間接に直接にゆるがされ、新しい時代への息づまる期待とともにその矛盾をさらけ出し、変革へなだれこんでいったそのような時代であった。

「天下を治むと云ふは失いなり。自然には乱も無く、治も



無く唯直耕安食安衣あるのみ。不耕貧食して直耕者に救われながら、民を治め、衆生を救ふなど云ふは、履を冠して笹を心の逆言大罪なり。」

マルクス、バクーニン出現の約一世紀半前、日本の歴史上、自然世の生活をその思想の根底に据え、強固な封建体制下、独自の共産制社会を打ち出した埋もれた一思想家がいた。安藤昌益。

彼が生きた時代は元祿から宝暦にわたり、主だった数だけでも百にも及ぶ一揆、打毀しが続発していた。当時は、儒教思想によって自然が規範的、静観的に人間を規制する身分的秩序原理として把えられていたのに対し、彼の思想は身分制度のみならず、政治、経済構造、宗教、医学、本草、物理等のあらゆる分野にわたり、すべて自然に対する深い洞察から出發し、「互性活真」（活きた自然の事実から、相対的に存在する萬有の性質原理）に包括し、人間の眞の生活を直耕直食としたのである。

彼は子弟たちを北海道から九州に至るまで（松前、八戸、秋田、須賀川、江戸、伊勢、大坂、京都、長崎）散在させた。彼らは医者であったり、薬屋であったり、代官であったり、いわゆる陽忍であった。昌益を中心にした思想の実践は、当時の情況下でいかに危険なものであったかは推察できる。彼らの行動が地方のさまざまな地点で打ち喘ぐ農民を中心とする下層民衆に一つ一つ確実に、生きる糧を生えつけた。そしてまた寄せては返す波の如く次第に高まりゆく一揆。打毀しを支えるには、おそらく名もない幾多の昌益が存在していた

はずである。

この時代はまた、幕臣、武士、浪人、医者、商、町人・・・さまざまな階層の人々が自らの知的欲求を貪欲に伸ばしつつあった。

今日に続く明日が、今日と変わらぬ明日であること、それがあたりまえとして在った身分秩序体制下、商品流通形態、交通形態の変化に伴う経済構造の変化は現象的次元から確実に人々の日常生活に於ける意識構造へと波及していった。

時は蘭学勃興期、江戸、京都、大阪、長崎を中心に諸科学実践の現実的基盤たる数多くの塾が形成されていった。その中心的存在に、杉田玄白の弟子大槻玄沢が起こした芝蘭堂があった。ここでは蘭学を通して、医学、天文学、薬学、物理学等諸科学知識の交換が行われ、京都、大阪付近からこの塾に席を置きその情熱に触れ、知識、実践方法を吸収し、自ら地方へ散って新たな運動の核としての塾を起す者も少なくなかった（小石元俊による京都の辻蘭堂、橋本宗吉による大阪の絲漢堂等々）。

塾に於ける運動は、幕末時代状況が生む必然的帰結として、医学関係者のみならず、田村藍水、平賀源内らの物産家、クナシリエトロフ島を探検した近藤重蔵、林子兵、工藤平助、洋画家司馬江漢等多くの市井の人間をもその渦中に巻き込みながら幕藩体制批判、経済構造、政治機構にまでも上昇していった。

そして、これまでの封建体制の諸矛盾をあげき出し、儒教支配による知識の独占をも打ち破り、諸階層、特に庶民の側

の精神構造へと影響していった。

飢饉で常に苦しむ農民は、その生命を保つために天候を予測し、天災に備える方策を必要とした。この必要は「農業全書」の著者、宮崎安貞、サツマイモの青木昆陽を生み、天文、歴史、地理学を育てた。商品経済の発達につれ、量を知ることが数学、測量学を發展させ、全国実測図の伊能忠敬を、博物産の学などを次々と生み出していくのである。経験をもとめあげていったこれらの自生的学問は次第に理論家への欲望を喚起し、未知への挑戦は全てを投げ打って進んでいく底知れぬ活力にあふれ、医学を中心に広範な展開を繰広げていくのである。

宝暦四年(1764)二月七日、京都郊外の刑場の片隅で三十八歳の男の首なし刑死体の解剖行われる。同八年長州萩、京都伏見、同九年萩で日本初の女性解剖、明和七年(1770)京都、そして同八年三月四日千住小塚原で……。名古屋玄医、後藤昆山が唱えはじめ香川修徳、吉益東洞、山脇東洋などがその大成者とされる古医方の人々には、医学での実証精神を鼓吹し、その主義に徹して自らの経験に徹しない限りは、いかなる古来の権威をも認めないという科学精神の発芽はあった。古来からの五臓六腑説に強い疑いをもっていた東洋は人体の正しい構造、機能を内部に及んで知ることによってはじめて病いは完治できると主張し、人体の内景を見ることを待ち望んでいた。彼の疑問は、カワウソの解剖によっても晴れることはなかった。刑死体の解剖は官の制するところであり、儒教が思想界を支配し、封建体制を支えていた当時、「受刑

死体であろうと死体を解くことは、残忍極まりない行為であり、君子の道に反する許されざる悪行」であるとか、「死体の臓器をみても生体の病を治すには役に立たない」という激しい非難の中で東洋らは覚悟をきめ、公許を懇願し、京都所司代酒井忠用から許可を受けここに日本初の人体解剖は行われたのである。人体を知ることが東洋らにとって何にも増して必要なことであった。これに刺激され刑死体解剖の火の手が上がり後に解体新書を訳出した杉田玄白、前野良沢を決定的に動かすことになる。儒教思想は学問への欲求の前に東洋らを支配しきることが出来ず、また、権力も彼らの覚悟に裏打ちされた医学の前に公許を余儀なくされたのである。このことは、ごく小さな事ではあるが完全を誇っていた意識支配の網を微力であるが確実に破っていくことになるのである。

備前岡山池田家の家来鈴木の総領旭山武士を捨て町医者となる。宝暦十二年(1762)平賀源内祿を辞す。明和六年(1769)麻田剛立脱藩。弘化四年(1821)豊後日出藩元家老帆足万里脱藩上京、被支配者の肉体と精神に対し、極限にまで自らを絶対者として貫こうとする封建体制下において、脱藩は忠誠を破るものとして自らが規制し、又、切腹を命じ、さらに悪事をした脱藩者には打首の重刑を課する厳しい掟があった。

内部矛盾をかかえ、切腹をも覚悟し、また身分として安定していた武士を捨て、家を捨て、自らの理念にまっしぐらに突き進んでいった彼らを支えたものは息づまるような「変革」「究明」へのさまざまな期待であった。意識し、あるいは

は意識しなかったにしろ、彼らのこうした事実への志向が人間の主情的世界から肉体的構造へ、そしてさらに人間を包む物理的、空間的世界へと拡大するにつれて、彼らの行為は着実に伝統的儒教の呪縛から自らを解放し、新しい時代の意識構造をつくり上げていくことになったのであり、科学のもつ具体性、事実性、実利性そのものに対する驚くばかりの発見が封建体制の絶対性をゆるがせ、彼らの内部に権力がみだりに立ち入ることのできない領域をつくり出していったのである。

## 文化・スポーツ活動の発展のために — 1968年大学工学部新聞に投稿 小波 淳(ペンネーム) —

昨年の学生大会が流会となり、新執行部の基本方針、活動方針が決定しないまま現在に至っている折、今年度の学友会活動はどうなるのだろうかという不安を持たざるを得ない。しかし執行部は動いている。一体何に基づいて動いているのだろうか。新入生歓迎行事にしても、文化・スポーツクラブを無視した歓迎合同実行委員会の設立、そしてその内容といえど昨年度とほとんど同じ。昨年度も感じたことではあるが、執行部は新入生歓迎の意味(私達三年・四年生にとっての、新入生にとっての)がわかっているのではないのか。映画(ミュージカル・恋愛物)、ダンスパーティー、ハイキング・・・と、お遊び行事とでもとらえているのだろうか。東京都立大教授の講演会ひとつだけが何かしら異種に思え

た。執行部の人達は講演の内容が私達にとって適切であり、良かったと総括しているが、私達にその内容がどのようなかみ合い、そしてどのように良かったのか、欠点は、又これからの私達の行為にどう結びつくのかという展望まで語らなければ総括といえないだろう。手放して喜んでいる時は、その後には必ず陥し穴が潜んでいることを知らなければならぬ。私が思うに、新入生を歓迎するということは、少なくとも現在当工学部学生が抱えている問題から、大きくは私達を取り巻く現状において私達が一個の人間として問題にしなければならぬことを新入生に提示し、話し合い、これから学友会活動に対する意識を高めることではないだろうか。執行部が口癖にしている民主主義、学内の統一と団体、○○○はこれからの行事の中のどこに顕われているのだろうか。ゲンパの会場にだろうか。合ハイにだろうか。さらには、サークル活動の活発化を口にしながら、サークルを無視した実行委員会設立をやっている事実をどうとらえたらよいのだろうか。ひじょうに疑問を持たざるを得ない。

このような折、最近わたされた学友会誌に「災」編集委員の名で「一層の文化、スポーツ活動の発展のために」というサークル論が載っているのに気付いた。この文に対して少々不満や疑問な点を感じざるを得なかったので、私のサークルに対する考えをおりませながら述べてみたいと思う。

「災」の人達は流会に終った学生大会において提出された対案書の中のサークル論に対して書いている。まず、クラブ

・サークル連絡協議会準備会が結成された時にサークル論・運動論がないといってその不明確さを指摘した人達を誤っていると書いている点から述べなければならぬ。

何ら方向性、運動論の欠如した運動において何かを為した例があるだろうか。何かとは何十項目かの要求を勝ちとるところではない。こういった要求はあくまでサークル活動をささえるものではあっても活動内容ではないはずである。運動論の不明確さという本質的な点を指摘したのに感情的な理由（実に本質的でない）でかたづけけることは絶対に間違っている。もっと謙虚にならなければならぬのではないだろうか。そして又勝ちとった要求から現在のサークルにおいてどのような活動がなされているかといえば、以前と変わらぬ、いや以前よりも低迷した活動が存在しているだけである。勝ちとったという成果を「炎」の人達や執行部は後生大事にしているが、現在のクラ連協が何をしているといえるのか。もちろんクラ連協の存在は有った方がいいし、有るべきものと思われるが、だからといって要求を勝ちとるだけの形骸化した有名無実の協議会であっていいはずのものではない。

「我々のサークルの意味は趣味でもなければ娯楽でもない。そして単なる人間関係、友人を求める機会を得るためだけでなく、又社会に出たら役立つ様な先輩、後輩の関係を、付き合い方を、協調の精神(?)を学ぶものではない」という文にどんな侮辱があるといえるのか。まさに当工学部サークル活動の大半に当てはまる問題点ではないのか。私達の周囲の

現実には目を向けずに何ら危険のない温床でぬくぬくとしている活動は絶対サークル活動とは認め難い。真にサークル活動で何かを創造し、止揚していくためにはこのようなべったりした人間関係を取り去り、裸で向き合った人間同士のはげしいぶつかりが必要である。

フォークソングに関する所を読んで私は笑ってしまった。要約すると、「ジョン・バエズはフォークソングを歌って反戦運動をしており、フォークソングはベトナム反戦と共に広まった↓日本にもフォークソングが流行している↓日本のフォークソングもりっぱな反戦運動をしている」と「炎」の人達は知っているが、私がここで指摘するまでもなく、明らかに誤った破論法と言える。確かにジョン・バエズは反戦歌(?)を歌い反戦運動をしている。だが日本のフォーク界では反戦の反すらも見い出せない現状ではないのか。さらに、バエズの反戦行為に関して問題にするときは彼女の行為のあり方、内容を問題にすべきであって表面にあらわれたことで判断するのもおかしいことである。そして、ひとつの例が全てに当てはまるという倫理の誤りは小学校ですでに教えられていることである。かの有名な森山かよ子ですら、「バエズは尊敬するが、私は反戦歌は歌いません」といっている。少なくとも　　の日本のフォークソングは、映画「日本春歌考」(大島渚作品)において扱われている程度のものでしかないことは明らかなことである。

運動部について同じようなことがいえる。現在の工學部の運動部をサークルという観点から考えるなら対案書に書かれてあった「その機能はいたずらに学養超過の、そして欲求不満のはけ口として存在するのではない」ということは間違っていない。しかし私が見る限りでは現在の運動部はサークルの機能は持つていないと思う。「炎」の人達は運動部の人達が一体どのような犠牲を払って活動しているか、といったのだろうか。私には我が身を鍛えるためと、べつたりとした人間関係のための犠牲であるとしか考えられない。もし運動部も対案書でいつている意味で、又私という意味でサークルであるとすれば、少なくとも独自の運動論が存在しているはずだが私はまだ聞いたことがない。

「民族的、民主的文化、自主的民主的學問研究、自主的、民主的スポーツを求め、創造的科學的精神を養い、健康で明るい學生生活をめざすことは學生にとって切實な具体的な要求である。」……よく並べたものだと思心させられる。余程民主、自主という言葉がお好きらしい。それはいいとしても、当工學部に「炎」の人達と同じ考えを有する方々の執行部が誕生してからのような民主云々が生まれたというのだろうか。民主的文化、民族的學問研究、民主的スポーツ etc. . . . これらは一体どのようなものなのだろうか。具体的な要求どころか全く抽象的な言葉ではないのか。第一、現実へ対処しようとする者にとってその前途は民主的云々の羅列で解決できる程明るいものでは決してないはずである。もっと現実を見つめなければ「炎」の人達という現

実(社會)を變革することはできないだろうし、そして又現実の穢さ暗さにもっと絶望し、その中から這い上ろうとするエネルギーこそが現実變革に群がるものだと思う。ベトナム云々いいながらのガンバや合ハイのようなレクリエーションの集りからはけつしてこのエネルギーは生まれたいことは確かである。

御苦勞なことに、サークルをイからチまで分類しているが、どうも運動体としてのサークルとただの集團をごちゃ混ぜにしているようだ。第一、サークルを手段、目的で分類すること自体おかしいと思う。このような非生産的なことはやめた方がいいと思う。サークル論は分類することではなくサークルの在り方や、やっていることを問題にすべきである。樂しみのためのサークルはそれとして認められるのではなく、それはあくまで樂しむための集まりであつてサークルではない。サークルとして考えられるのはどのような手段、目的のサークルであれその根底に共通したサークルの意義は存在するのです。そして集まった人達が独自の運動をサークル内で、さらにはサークルの外の現実へ向けていく運動体としてのサークルのみが現実變革のエネルギーを包含しうることとは明白なことである。

グリーなどは新入生歡迎オリエンテーションにおいて、「私達のサークルは歌つて樂しむ集まり」といつている。これは自らサークルとしての持ち得る機能を捨ててしまったものと見做して誤りはないだろう。私が見る限り、工學部内で

わずかにサークル的に活動していると思われるのは社研と写真くらいである。しかしこの二つのサークルとしてその内部における運動もさることながら、とくにその運動をサークルの外側へ向けて展開していく所に多くの問題があるように思われる、つまりサークル内での考え、方法が外へ向つては強力な力となっていないということである。しかしながら少なくともサークル内で真剣に自己の問題に取り組む姿勢に、運動体としての可能性の一端が見い出せるだけでもこの停滞した工学部サークルにとって貴重であろう。

私がこのように反論してきた点を考えてみて、「炎」の人達が反動勢力、分裂主義者呼ばわりする対案書のサークル論に一体どのような反動が分裂工作があるといえるのだろうか。むしろ「炎」の人達が用いる感情的なセクトやドグマが明らかにするだけではないだろうか。私がこのこととを指摘するよりもっと的確に指摘している文を引用してみよう。

石堂淑郎「映画における幻想と死」(デザイン批評・1968  
・2・NO・5)より

．．．．．中略．．．．．

つまり、ポニーとクライド(アーサー・ペン監督)俺たちに明日はないの主人公達は、絶望をその両肩におぶつたまま譲らず遂に殺され、創価学会・民青はその絶望を宗教的・政治的幻想という偽りの希望に肩代わりさせるのだが、

少なくとも前者は精神的な疎外を肉体によってうけとめることによってプロテストしているのに、後者は疎外からより大いなる疎外へと移行しているだけなのである。キエルケゴール風にいえば絶望を絶望としてうけとめて死ぬのと、絶望を希望という名の絶望に肩代わりさせてニコニコするのとどちらがより絶望的であるのか、勿論、後者である。これをいま別の面から考えてみれば、学会なり民青なりの核である宗教的、政治的幻想は敵対者に対する憎悪をその唯一の栄養としていることがあげられる。つまり彼らのニコニコ顔は非同調者に対する憎悪の顔と表裏で一体であることを忘れてはならない。それは幻想という見えざる呪縛の力にとらえられている人間のつねである。

．．．．．後略．．．．．

「炎」の人達はこの引用文の内容をどのようにとらえられるでしょうか。

「炎」の人達は対案書を部分的にとらえて非難しているが、さてそれはどうすればいいのかという点に關しては、民主的、自主的云々という一般的抽象的言語をふりかざすのでは仕方がないでしょう。これはあくまで非難でしかない。読む方でも戸

惑うし不満を感じて当然です。それに、現在の日本ではどこにも民主的と名のつくものは存在していないと思うし、私には「炎」の人達のような民主云々は永久に存在しないような気がします。いやたとえ存在したとしてもそれは真の民

主云々ではないと思う。第一、民主主義の原理とよくいわれている多数決の原理ほど暴力的なものはないのですから。最後まで個と個のはげしいぶつかり合いでなければならず、その中で運動を發展していくのがサークルであると思う。

現在、工学部サークル内に巣喰ってっている低迷とマンネリの根本的原因是、サークル員一人一人が個としてのサークルに対する意識を持っていないことにある。つまり、サークルは何を為しうるのか、何を為さなければならぬのか、サークルが現実（社会）の中でどのように位置づけられるのか、サークル員たる個人はいかなる行為をすべきかといった点が追求されなければならないのである。又自分の生き方に対して何ら疑問や悩みを感じられない（自らの甘さのため）点にもその原因があるだろう。従って現状において必要なのは、サークルの一人一人が一個の人間として自己への問いかけを始めることである。自己の存在のしかたを疑うことである。

サークルが運動体としての機能を持ちうるのは、前述の行為をなしたサークル員一人一人が現実の中で抱えている諸問題をサークル活動の中に持込んだ時である。この時にこそ具体的サークル活動（例えば、写真部なら写真を見、撮ること）によってさまざまな問題が提起されなければならない。しかし、現在の工学部のサークルの状況ではそういった問題提起も大部分のサークル存続主義者によって打消されるかも知れない。しかし私達は、サークルはサークル存続のための

サークルではなく、又こういつた存続主義者のものでもなく、一個人の意見を消し去っていい理由はどこにも存在しないのだということをして、サークルを動かしていくのは構成員一人一人であることを考えなければならぬ。そしてサークルがその機能を持ちえた時、私達のまわりの様々な問題を生ましている現実（社会）へ向って、真の行為がなされるのである。そうでなければ個人の問題は個人の中で内閉するサイクルを描くだけで終るだろう。そして現実はいも変わらず私達を呑み込みながら膨大に変化し続けるだけである。

現在サークルの問題に取組んでいるある女性はいっている。

『蟻地獄の中にいる蟻と同じ状態ではあるけれど、蟻地獄には死がまっているが私達のは、いわゆる楽な事がまっている。今この手をはなせば、楽になるのだが……』と。（でも）いくら振り出しに逆戻りしても負けたくない』と。又他の女性はこういつている。『奇妙なことには、過酷なはずの社会の中には広漠と安易さが広がっているのだが、その中にとつぷりと浸ってしまい、そこから出ようとものがくことさえ愚劣であると思わせるような抜け道のないいらだちの中にはまり込んでしまう。そしてこの慣れこそが、生ずることの中に於てある歓楽に与えられた極めて凄烈な復讐であるのかもしれない』と。この二人のことばには私の内部に鋭く突きささる。このような自己へのきびしい告発の例は、まさに工

学部の大半のサークルが、又個人が現状況における自己の問題として真剣に取組まなければならぬ点を確に指摘している。そして、もはや個人的な問題から具体的サークル活動を通して一つ一つ解決していく行為を明日といわず今から始めなければならぬ。しかも、自分でやらなければ他の人は誰もやってはくれないことをはつきり自覚しなければならぬ。

雪が舞う東北の地への風信 — 1970年 会社同期会誌「むくの声」第4号に投稿 小波 淳（ペンネーム）—

わたしがおまえのすむ（かつてわたしもすんだ）土地を離れてからも二度目の冬を迎えようとしている。

かつて、離れるに際しわたしの幼さをむきだしにしておまえに迫ったものだった。そのしぐさの幼さをしつたわたしではあったが、思いつめてまた同じようなことをやってしまう最近のわたしであることを思うとき、わたしがわたしとおまえの関係を「対なる幻想」という領域で対象化しようとしていることも、結局はまだまだ未熟なものであることを思うのだ。わたしに関する領域がそのままおまえのものへ、そしておまえに関する領域がとりも直さずわたしのものへという地続きの関係を現実的たらしめる方法論を獲得するにはまだまだお互いに幼いようだ。もしかしたら、それは方法論などと規定する必要のない、男と女の間にときたま交わされるあの言葉にならないものにかかわることなの

かもしれない。

先だって、めずらしく上京してきた兄と、若干の気恥しさを覚えながらおまえとわたしの関係を語り合える一夜をえられた。そのときもやはりわたしたちがまだまだ未知の関係にあり、おまえを包括しうるわたしの空間の未熟さを思った。それはおまえにとつてもいえることだろう。最近短かい文章を読んだ。その中に、ある一組の夫婦の存在のし方についてのべている部分がある。少し長くなるが書きとめておこう。

.....

・・・山の中で夫婦二人きりでくらししていればこうなるよりほかないとおもわれるように、今日ついたばかりの眼にもふたりの間が温かくすつきりと疎通していることがすぐわかった。（中略）そして高地のせい、夫婦のどちらにも粘着するようなものはなく乾いてさばさばしているのも、わたしの眼には愉しかった。息子は出征して、いまはこの宿の並びに家をつくって自給しているといったことが、その夜いろいろ端で書いた夫婦の身上であった。この夫婦は忘れたがい印象を弱年のわたしにのこした。

いろいろ端には、ときどき鼠がちよろちよろ出てきて、うろろ餌になるものをさがしている様子だったが、驚いたことにわたしたちがいてもすこしも怖がらず、夫婦も追い払おうとしなかった。（こんな山の中ですから鼠も家族みたいなもので）といいながら、丁度飼った猫にいうように奥さんかときどき「すこしあつちへいっておいで」と鼠のほうへ声



をかけ手で追うしぐさをする。奥さんにしいて追い払うつもりがないので、鼠のほうも逃げる気はないらしい。どこかへ引っこんでは、またちよるちよるあらわれるのだった。

ああこの夫婦はいいな、この主人の声はすんでいい声だ、この奥さんは親しそんでいて粘りつけがなくていい。そういう夫婦もこんな山の中だからこそ在りうるのだな。おれたちはどうせ戦争で駄目だが、こういう夫婦に偶然であったことはおれにはどんなにこの世の土産になるかもしれない。わたしはしきりにそんなことばかりかんがえていた……

以上

――吉本隆明「自立の思想的根拠」――ひとつの死より――

……

この文章からおまえがなにを想うかわからないが、ごく平凡ないわゆる庶民ともいえる夫婦の關係に 対する一人の人間の感性が、そして共感が書かれてあることはわかると思う。

この風信を書いている今、ラジオのニュースは今日の事件（三島由紀夫の割腹自殺）を報じた。

一瞬嘔吐を覚えた。それが何によるのか今はわからないけれど引用した文章の著者と同じく、夫婦の 在り方に共感する自分と、三島という一人の著名な人間の死に嘔吐を覚える自分……。

わたしにとっては何らかの（仮にその夫婦の死がわたしに報じられたとして）山の夫婦の在り方のほうが重たいと感じられる。たしかに三島の死は（詳しいことはわからないので

何ともいえぬが）このようにも人は死ぬるものかということとで衝撃を覚える。しかしそれがわたしの「人が生きる」ということに対する思想的次元にまでくい込むものではない。山の中の夫婦の在り方のほうがより基底部においてわたしとつながっているように思えてならないのだ。

人は何によって生きるか（生活するか）。また死にうるべきいかなる理由をももちうるのだろうか。

三島の死は死にうるべき理由を持った（？）一つの例といえるのかもしれない。それにしてもあまりに直截すぎはしないか。私には生きる過程も死に至る過程（死に過程もくそもないといえるかもしれないが）も、もつとゆるやかなじつくり煮つめられていくべきもののように思えるのだ。また、生き抜くことに、自らの全存在を投入していく過程はいかなる名目を伴った死などよりも得難く思える。

三島の死が人々にどのように影響するかはしらぬが、人が生活のレベルを他から影響をうけるのは、日常の現実性、具体性を通じて昇華されたもの、また逆過程をたどれば人の日常の基盤となるもの（「思想」）からであると思えるのだ。

まだまだ幼いわたしたちはさらに多くの生活者からその過程を学ばなければならないようだ。

おそらく、人間が一人から二人に、さらに二人からより多数へとその關係を拡げていく過程には、拡がる度合に忘じて多くのものが抜け落ちていくはずだから……。

一つの死を契機に、最初に書き始めたことだからだ。いぶそれ

たように思うが、一九七〇年十一月二五日現在わたしが思うことはこんなことである。

これから訪づれる長い冬を想うとき、東北の地の風土は少なからずわたしの精神形成に影響しているようだ。より暖かいこの地において囲りは冬とはいえど明るくなごやかだが、わたしの心は雪の舞う東北の地にいるのとたいして変わりはない。

## やましんサロン投稿記事から

令和2年4月16日掲載.. 「写真短歌」 知り親んで

写真を長年続けてきた私は最近数年短歌を嗜むようになり、写真も短歌もその作るプロセスに共通点があることに気がきました。そしてこの二つを合体して一つの作品にしたら面白いのではと考え、「情景を切り撮って詠う『写真短歌』として紹介することを思い立ちました。

「何気ない一枚の写真に短歌を添えて発信力が増す魅力を紹介します」というキャッチフレーズを考えていたところ、ご縁があり山形市立図書館からありがたい計らいを頂戴し、昨年2月から本館1階に「写真短歌常設コーナー」を設けて作品を紹介しております。

季節を先取りした写真にやましん歌壇に掲載された短歌などを添えた写真短歌2作品を2ヶ月毎に入れ替えて展示し、図書館を訪れる方々の息抜きの空間になればとの想いで継続しております。

また、1年間展示してきた12作品をこの2月22日から1ヶ月間開催された「山形市立図書館2016年市民の出版物

展」でまとめて展示する機会をいただき、写真短歌という分野の一端を紹介することができました。

常設コーナーは2年目を迎え第7回（2～3月）、第8回（4～6月）の作品展示をしております（現在は休館中）。

山形新聞、市広報、メルマガなどの紹介記事を見て訪れた方や日々来館された方からご連絡をいただいで情報交流につながっております。

今後もの展示を継続することで写真短歌の認知度が上がり、たしなむ方が増えるささやかな一歩になることを願っております。

令和2年10月23日掲載.. 投稿契機 交流生まれる

今年4月やましんサロンに掲載された「写真短歌」を知り親しんで」という私の投稿が契機となり、さまざまな方々との交流が生まれております。

また、その効果もあってか、昨年11月に私のホームページ（HP）のリニューアルを機に開設した「写真短歌・写真俳句・その他の投稿ページ」に写真、短歌、俳句、回文、イラストなど「組合せの妙」とも言える74作品の投稿をいただくまでになりました。

一方、2年目終盤に入った山形市立図書館常設コーナー「写真短歌」への誘いの掲示作業や職員の方々との意見交

換で前述の作品群が話題になりました。そして、下記の三つの規定に沿って2ヶ月ごとに2作品を入れ替え、常設コーナーⅡ「表現の杜」への誘い」としてこの8月から紹介することになりました。

対象は①私のHPへの投稿作品(写真短文、写真俳句、写真回文、回文イラストなど)②フェイスブックの「友達の投稿」に掲載されている写真短文、写真俳句など③友達の投稿内の写真に触発されて私が短文添えて共同制作作品とした写真短文です。

「『写真短文』への誘い」「『表現の杜』への誘い」という二つの常設コーナーがこれからも図書館を訪れた方々にとって息抜き場となり、さまざまな表現方法の広がりを生み、それらをたしなむ方々が増えるささやかな一歩になることを願っています。

### 令和3年1月21日掲載… 福祉向上へ活動を発信

当ガイドマップは平成15年に開設して以来19年の間山形市福祉のまちづくり委員会が運営・更新を続けています。

この間、障がい者のニーズに応える対応を進める中、ラスボーツ、アピリンピック、パラリンピックやインバウンドの波が山形にも届き始め、当該マップの多言語化ニーズの高まりを感じていました。

この度『赤い羽根共同募金』の補助を受け令和3年度の委員会の活動として本事業遂行を進めてきました。事業着想時(数年前)、HPの多言語化は都度翻訳作業を経てHPに掲載するのが主だったため事業の計画は英文化のみでした。その後Webサイトにおける翻訳の現状調査をしたところその技術や翻訳サービスが大きく進化し、大手○○○の無料自動翻訳サービスでは英文に限らず多数の言語まで対応しており、この自動翻訳(特に英語)の精度の検証結果では固有名詞について不適切な数カ所がある程度で十分に実用に耐えうる事が判りました。また、市内に在住する外国人の数や当HPへの外国人アクセス者のデータをもとに利用者の利便性を考え英語の他に中国語、韓国語のバージョンにも当該サイトから簡単に展開できる表記を加えました。

私たちは海外渡航など特段のニーズが無い限り外国語でWebサイトへアクセスすることは少ないと言えますがこれを機会に多くの日本人の方々にも多言語化に対応したこの山形市バリアフリーガイドマップにアクセスする機会が増えることを願っています。

### 令和3年4月11日掲載… 15年の活動に意見せひ

私がかつて山形の地を離れ神奈川の企業に30年勤務した後1999年にUターンし、企業で培ったスキルを活かして山形で起業しました。当時はまだ少なかった産学官民をサポートする課題解決コラボレーターとして仕事をしてきまし

た。この間、NPOやボランティアなど「民」を支援する業務にも携わり、70歳で法人を解散してからも地域活動を続けています。

この地域活動の一つに地域力共創推進コンソーシアム（以下、コンソ）の活動があります。「地域力を創発・発展させるためのコミュニケーション・プラットフォーム」として活動し昨年15年目を迎えました。昨年度当初にコロナ禍が発生したことから、この年をコンソの「15年の活動の軌跡」を冊子としてまとめる年と位置付けました。そして、より多くの方々に届けるためパソコンやスマホ端末で読んだり印刷したりすることが可能な電子ブックとして5月末に発刊し、Web公開しました。

この冊子には15年間の活動の軌跡の掲載の他、さまざまな形で活動に関わっていただいたコアな関係者10人からの寄稿を掲載するとともに、いただいたご意見、要望は「活動の総括&展望」の章に反映し、現在その具体化を模索しております。

この電子ブックは「地域力共創推進コンソーシアム」で検索して見ることができます。皆様のご意見をお待ちしています。

## 荘内日報投稿記事から

令和4年11月22日「私の一冊」に掲載…  
「名こそ惜しけれ」の精神

取り上げる一冊は少し古いが2005年発行の「国家の品格」。著者は作家新田次郎と藤原ていの次男で数学者の藤原正彦氏。たまたま書店で「国家の品格」という書名が目に入り購入。氏の書籍との初めての出会いとなった。

私がUターンする前に30年間の企業勤務を経験しその間で海外駐在を経験しているからだろうか特にこの本の第の章『なぜ「情緒と形」が大事なのか』の中の「真の国際人には外国語は関係ない」大切なのは「国語、読書などによる総合力」と言い切る多言語に長けた著者の言葉が重く心に残っている。

この論述に反応する自分には次のような社会経験があるからだろうと思っっている。一つは企業入社して間もない頃の会社の英会話教室で米国人教師に「日本の結婚式で女性が身に付ける「角隠し」と「綿帽子」の違いは？」と問われ、私を含め誰も答えることが出来なかったこと。二つ目は後年の海外駐在現場のパーティ席上で欧米の技術者から日本の歌舞伎や文楽、狂言などについて問われてその答えに窮したこと。日本語ですらうまく語れないことを英語で出来ないのは明らか。これらの苦い経験を記憶に留めて今の私があると思っ

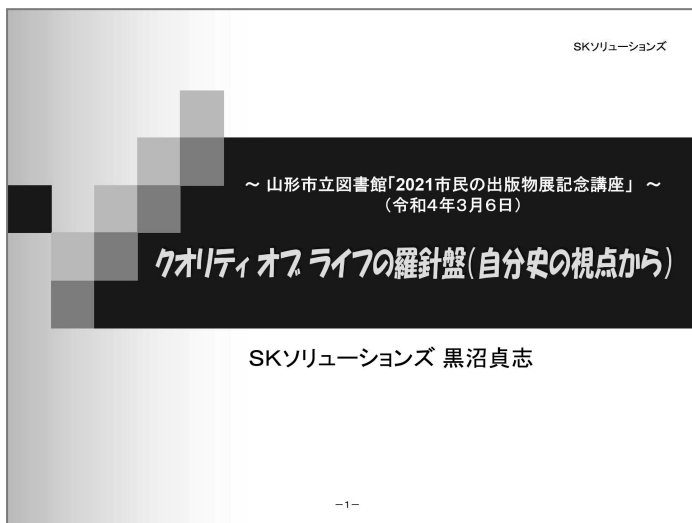
ている。Uターンして20余年、今やGoogleの無料翻訳など便利な時代となり隔世の感（過ぎたる便利に潜む不便利もあるが・・・）。

本書の最後の章「国家の品格」の最後の項「世界を救うのは日本人」に記されている次の箇所強く共感を覚えるのでその一端を紹介したい。

「駐日フランス大使を務めた詩人のポール・クロードルは、大東亜戦争の帰趨のはっきりした昭和十八年に、パリでこう言いました。「日本は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」

このような考えは司馬遼太郎の「名こそ惜しけれ」という精神に通底するのではと思っるのは私の勝手だろうかと自問する今日この頃。





SKソリューションズ

Contents(もくじ)

☆プロローグ ・配布&机上紹介資料 ・講座の位置づけに代えて ・プロフィールに代えて	☆日々の“こころがけ(準備作業)”
☆はじめに	☆四住期の整理から羅針盤への道筋
☆ライフサイクル(人生)の区分	☆参考事例
☆クオリティオブライフ(QOL)の対象	☆制作した冊子、デジタルコンテンツなどの利活用(寄贈、納本、その他)
☆人生の四住期に沿って振り返って整理することの意味と方法	☆まとめて代えて
	☆終わりに
	☆質疑応答&補足説明

-2-

## プロローグ①(配布 & 机上紹介資料)

### ♪ 配布資料:

- ・説明資料
- ・添付1: DVD私的アンソロジーの「DVDカバーシート」
- ・添付2: 同上の「プロローグ」
- ・添付3: 同上の「メニュー & マップ」
- ・添付4: 倉本聰の「履歴書」

### ♪ 机上紹介資料:

- ・DVD「私的アンソロジー」
- ・冊子「統 私的アンソロジー“しあわせの構図”」
- ・団体の発行資料
  - ①山形げんきであったかづくり
  - ②やまがた食の甲子園<sup>®</sup>10年史(2005-2014)
  - ③地域力共創推進コンソーシアム活動の15年の軌跡 2006～2020
  - ④東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み

## プロローグ②(講座の位置づけに代えて)

### そったく どうじ 啐啄同時

禅の言葉に「啐啄同時」というのがあります、卵の中のヒナ鳥が殻を破って まさに生まれ出ようとする時、卵の殻を内側から雛がコツコツとつつくことを「啐」といい、ちょうどその時、親鳥が外から殻をコツコツとつつくのを「啄」といいます。雛鳥が内側からつつく「啐」と親鳥が外側からつつく「啄」とによって 殻が破れて中から雛鳥が出てくるのです。両方が一致して雛が生まれる「機を得て両者相応じる得難い好機」のことを「啐啄同時」というのです。・・・早くてもいけない、遅くてもいけない、まことに大事なそれだけに危険な一瞬であり啐啄は同時でなくてはなりません。

#### < 出典 >

禅の公案書である碧巖録(へきがんろく)であると言われていています。また、京都教育大学の学長室には元学長の山内得立先生(ギリシャ哲学の大家)の書がかかっているそうです。



### プロローグ③(プロフィールに代えて)

- ♪ 1947年 山形市生まれ
- ♪ 山形東高、山形大学工学部を卒業
- ♪ 1969年 日揮(株)入社(30年勤務)
  - 企画・プランニング・基本設計・建設・運転・プロジェクトマネジメント・営業などを通して海外および国内産業界の各種ソリューション(課題解決)・プラント建設・運転などを担当
- ♪ 1999年 日揮(株)を早期退職してUターン
- ♪ 2001年 (有)SKソリューションズを設立(2016年解散。その後はSKソリューションズとして活動中)
- ♪ その後、ビジネスや産学官民連携支援、更には主に次のような「しくみ」などを通じて地域活動を継続中
  - ・地域力共創推進コンソーシアム(代表)
  - ・おいしい山形の食と文化を考える会(事務局長代理)
  - ・東北まちづくりオフサイトミーティング(運営委員)
  - ・NPOパワーアップコンソーシアム(代表)
  - ・山形市福祉のまちづくり活動委員会(事務局長⇒監査)
  - ・(LLP)山形ふるさと企画舎(代表)
  - ・山形県生涯学習センター遊学館講師・指導者

### はじめに

古来、人の一生は四つに分けて語られておりそれぞれの期間を“どのように生きるか”を記した情報が多く見られます。そして昨今、人の生き方は“クオリティオブライフ(QOL:生活の質)”として語られるようになっていきます。

このQOLを高める生き方が注目されるいま、これまでの普段の生活を振り返り、今後の“人生の道しるべ(羅針盤)”にできるような方法について事例を交えて紹介します。

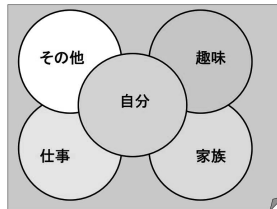
## ライフサイクル(人生)の区分

人生を4つに区切って考えることは古代インドの社会的規範を記した聖典「マヌ法典」の考え方で【四住期】として知られています。特に「林住期」や「遊行期」は作家の五木寛之氏の著作で知られるようになりました。氏はこれに日本で良く知られる青春、朱夏、白秋、玄冬を対比して記しています。

学生期( ~24歳) ⇔ 青春  
 家住期(25歳~49歳) ⇔ 朱夏  
 林住期(50歳~74歳) ⇔ 白秋  
 遊行期(75歳~ ) ⇔ 玄冬

## クオリティオブライフ(QOL)の対象

誰もそのライフサイクルの中で自分、家族、仕事、趣味、その他の領域で何かしらの出来事やテーマを持つことになります。つまり、それぞれの場面で程度の差こそあれ(また、意識するかどうかは別にして)アクティビティ<プロジェクト(事業)、イベント(出来事)、エピソード(逸話)>を経験しながら生きています。例を挙げれば入学、就職、結婚、子供の誕生、病気...様々の経験をすることになります。



### 人生の四住期に沿って振り返って整理することの意味と方法①

下記に例示するような縦軸に自分の生活の 카테고리(自分、家庭、仕事、趣味、その他)を横軸に四住期の座標軸を作成して、それぞれが交わる領域にどのような出来事(アクティビティ)があったか列挙することで全体像(自分が歩んできた道)が見えてきます。

生活の 카테고리 & アクティビティ \ 四住期	学生期	家住期	林住期	遊行期
自分				
家庭				
仕事				
趣味				
その他				

-9-

### 人生の四住期に沿って振り返って整理することの意味と方法②

私が60歳で上梓したPCで見る「DVD 私的アンソロジー」を制作した際に事前に作成した「メニュー&マップ」をお手元に用意しましたので紹介します(添付2)。

この時はこれがまとまったことで目的とする成果物の“**コンテンツ(もくじ)**”と“**全体のイメージ**”がほぼできたことになりました。

因みに、TVドラマ“北の国から”で知られる脚本家(私の好きな脚本家の一人)倉本聰はひとつの作品をつくる時に主要登場人物のアウトラインを表わす「履歴書(就職時に使うものとは異なる)」を作ると紹介していました。特に大きな作品ではそれらは巻紙のようになっているものをTV番組で紹介していました。そのことが作品(脚本)の中の登場人物のしぐさ、台詞や場面描写に活かされると理解しました。

氏の「履歴書」作りの概要は添付3を参照ください。

-10-

## 日々の“こころがけ(準備作業)”

コンテンツが出来上がるとそれぞれの中味をどうするか(どのように表現するか)の段階になります。  
幸いにも私の場合は起業してしばらくしてHPを作成&更新して添付2に記載したアクティビティのほとんどの項目はHPにアップしており大半のデータの準備ができておりました。

つまり、大事なことは日々の「**生活のカテゴリー&アクティビティ(自分、家庭、仕事、趣味、その他)**」を**如何に記録しているか**にかかっているということになります。

## 四住期の整理から羅針盤への道筋

- ①「四住期×生活のカテゴリー」の整理  
⇒アクティビティの「見える化」作業
- ↓
- ②エブック(代表的)なアクティビティの洗い出し
- ↓
- ③コンテンツの作成
- ↓
- ④表現方法の選択:ワードなどの文書作成ソフトの選定  
⇒ PDF化、画像化(JPEGなど)
- ↓
- ⑤表現手段(媒体例:冊子印刷、デジタルブック、手作り冊子、PC版DVD、その他)の選定
  - ・冊子印刷:一般的な印刷所、ネット印刷
  - ・電子ブック:Webサイト上で冊子をめくる様に読むことができる媒体(比較的廉価)
  - ・手作り冊子:冊子部数に制限
  - ・PC版DVD:

## 参考事例①:個人レベル(自分史など)から

これまで個人のレベルの話をしてきました。それらは

### ①DVD「私的アンソロジー」の発刊(60歳)

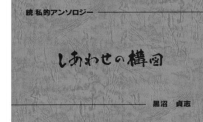
制作ソフト(Adobe flash player)がサービスを  
終えており現在は再現不可



### ②冊子(&電子ブック)「続 私的アンソロジー “しあわせの構図”」の発刊(70歳)

- ・表紙画像(題字は佐藤紀之氏の書)
- ・電子ブック

URL <https://sk-solutions.org/archives/anthology2>



## 参考事例②:団体レベル(活動史など)から

例えば、私が関わってきた次のような各種地域活動も対象を個人から組織に広げたものと言えます。

- (1)「山形げんきであつたかづくり」 31頁  
山形市委嘱で活動して制作した「山形市バリアフリーのまちづくり推進モデル」の冊子とその電子データ(PDF) 実冊子:机上サンプル参照
- (2)「やまがた食の甲子園®10年史(2005-2014)」 30頁  
おいしい山形の食と文化を考える会の「食の甲子園®」を紹介する冊子&電子データ(PDF) 実冊子:机上サンプル参照
- (3)「活動の15年の軌跡 2006~2020」 36頁  
地域力共創推進コンソーシアムの活動の軌跡を纏めた電子ブック(\*), 電子データ(PDF)と冊子  
実冊子:机上サンプル参照  
(\*): [https://sk-solutions.org/RPCC15th/index\\_h5.html#1](https://sk-solutions.org/RPCC15th/index_h5.html#1)
- (4)「未来へ伝えたい”東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み”復興ボランティア支援センターやまがたの活動10年のあゆみを纏めた冊子&電子データ(PDF) 60頁 実冊子:机上サンプル参照



## 制作した冊子、デジタルコンテンツなどの利活用(寄贈、納本、その他)

## &lt;受入れ先&gt;

## (1)公的機関

- ①居住地の県、市立図書館など: 冊子のみ
- ②日本自分史センター(公財かすがい市民文化財団): 冊子、DVD
- ③国立国会図書館: 冊子&デジタルコンテンツ

## (2)民間: 印刷所、ネット印刷会社のなどのWebサイト実績集に掲載

## &lt;提供実績例: 寄贈、納本、その他&gt;

受入れ先	(1)公的機関				(2)民間
	①居住地の県、市立図書館など	②日本自分史センター	③国立国会図書館 冊子	デジタルコンテンツ	
実績事例 T-①②③の私的アンソロジー		○			
T-② 続 私的アンソロジー 「しあわせの横顔」	○	○	○	○	○
Z-① 山形元気であったかづくり	○	○	○	○	
Z-② やまがた食の甲子園 10年史(2005-2014)	未定	未定	未定	○	
Z-③ 活動の15年の軌跡 2006～2020	○	○	○	○	○
Z-④ 東日本大震災 山形の支援活動10年の歩み	?	?	?	?	?

- 15 -

## まとめに代えて①(人生の節目を詠んだ短歌: やましん歌壇掲載歌から)

- ◎令和三年 大滝 保進  
亡き母の彩見の日記に挿まれし彼岸の兄の記事の懐かし(写真短歌)⇒思わぬ発見
- ◎令和三年 佐藤幹夫進  
名を刺す指輪で特定されし友散りし砂漠禱祈る十回忌⇒かつての友の死が判明した理由
- ◎令和三年 井上管子進  
寄贈せし己が冊子の納まりし書架の隅舞台のごとし(写真短歌)  
⇒市立図書館へ冊子を寄贈した時
- ◎令和二年 佐藤幹夫進  
「おとうさん」幼い文字の絵日記が不意に現るキャビネットの奥⇒思わぬ発見
- ◎平成三十年 井上管子進  
中東で散りし友らの七回忌雪の凍む朝この地で祈る⇒76/エリ7事件(務めた会社)が遭遇
- ◎平成三十年 門部京子進  
一病とつき合いてはや半世紀遊道の門への錫杖とせむ⇒自身の持病との付き合い
- ◎平成二十九年 大滝 保進(筆頭一席)  
断捨離の成果の箱を古書店へこころ残りの帰路はたそがれ⇒書籍処分時
- ◎平成二十九年 井上管子進(筆頭二席)  
いつからか知己の名探す「おくやみ欄」思い湧きいづわが名の覆る日  
⇒自身の老いを意識した時
- ◎平成二十八年 大滝 保進  
いつよりか「世話にはならぬ」が揺らぎをり遠くに暮らす娘と語れば⇒娘との会話から
- ◎平成二十八年 大滝 保進  
起業よりはや十五年廃業の意思を固めぬ勤労感謝日⇒会社を閉める決断をした時
- ◎平成二十七年 井上管子進  
十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりぬマイライフワーク⇒プレゼン資料作成時

- 16 -

## まとめに代えて②(講師の羅針盤の例 : 70歳時点)

弊冊子「続私的アンソロジー“しあわせの構図”」から転載

### <遊行期へのメッセージ>

林住期(50～75歳)の途上にある身では遊行期(75歳～)について触れることは難しいことです。

それを経験できるかどうかさえ予測不可能なことから。

\*「社会から身を引いて」……これは自信をもって言えます

\*「欲望を抑えて」……む・む・む……

\*「死を意識して」……意識の内容次第とも言えます

自身がこの世に生かされていた場合は おそらく

≪ 孤独な一人旅をしながら異空間へ突き抜けていく ≫

ための処方箋を模索して悪あがきしていることでしょう。

## まとめに代えて③(講師の羅針盤の例 : 75歳)

<遊行期の門(75歳での目標)>

70歳で冊子(&デジタルブック)を発売して以降あためてきたのが続・続編の発刊です。

「心身が許すなら75歳で「続・続 私的アンソロジー“しあわせの構図”を発刊したい」と色んな場面で記してきました。

現時点では5部冊の構成を予定しておりアウトラインは次のようなものです。

- I 序
- II 歌集
- III 写真短歌集
- IV 表現の社作品集(責任編集)
- V コラム「飛耳長目」/著作・投稿・寄稿集/その他

## 終わりに

・・・ 講師からの質問 ・・・

“人生の四住期に沿って振り返って整理”して今後の  
“人生の道しるべ（羅針盤）”をつくるような  
【実践ワークショップ講座（今回の復習も含む）】  
の企画があれば参加を希望されますか？

SKソリューションズ  
代表 黒沼 貞志

〒990-0832 山形市西田1-12-10

TEL 090-2522-4548

FAX 023-646-2448

E-mail sks@sk-solutions.org

URL <https://sk-solutions.org/>

Facebook <https://www.facebook.com/sadashi.kuronuma/>

## 質疑応答&補足説明

ここからは時間の許す範囲で皆さんからの質問や資料などの  
補足説明の時間といたします。



SKZソリューションズ

山形市立図書館市民の出版物展2022  
 記念講座「写真短歌への誘い」  
 SKソリューションズ 黒岩貞志

◆講座企画

- ・基盤編（基礎講座十周年作品展監賞）：本日市民の出版物展2022記念講座で実施
- ・実践編（WS：例題による練習）：〇月〇日 2023年度企画？
- ・高賞編（参加者の写真短歌の発表と交流）：〇月〇日 同上？

◆講師プロフィール：

- ♪ 1947年 山形市生まれ（山形県高、山形大学工学部を卒業）
- ♪ 1969年 日揮㈱入社
- ♪ 1999年 日揮㈱（現日揮 HILDS）を早期退職してUターン
- ♪ 2001年 ㈱SKソリューションズを設立
- ♪ 2016年 解散。その後SKソリューションズとして活動中

◆講座内容：お気軽に写真に短歌を添えた表現活動を楽しみ講座。

・・・写真と短歌を結合せた「相乗効果」  
 が生み出す新しい世界・・・

♪ 1st ステップ：短歌の端みと楽しみ

◆短歌を詠むということ（講師の場合）：


人生を数回楽しむ集まり「遊縁の衆」で短歌に興じる機会があり一人の経験者以外は参加者全員が未経験者でスタート。中学生の教科書に載っている短歌の教材から始まり自派の短歌の合評会を重ねてながらその楽しみを継続して6年後に歌集「遊縁」を発刊。

◆参考資料

- ・中学生の教科書に載っている短歌の教材（参考）：配布資料参照
- ・言葉の解片を五文字、七文字に整理してみる：

参考書：五七語辞典（三省堂）

日本人のリズムの標準とある五音七音の調べを、送句・連句・短歌・川柳・俳句など、とまじは江戸から昭和前期までの各時代を代表する約60人の著名作家たちの名号・名歌から採集した本



18  
 Copyright SKZ/山形 SKZ SOLUTIONS SADASHI kuronuma (2001～)

SKZソリューションズ


◆五文字、七文字を五・七・五・七に組合わせてみる⇒繰返す：「遊縁」

◆喜び：つぶやきを紡いで三十一文字に立てる面白さ、楽しさ、できた時の達成感！

◆発見！！：短歌を詠むプロセスと写真の作品作りの「類似性」

写真を長年続けてきた私は最近数年短歌を詠むようになり、写真も短歌もその作るプロセスに共通点があることに気付きました。そしてこの二つを合体して一つの作品にしたら面白いのではと考え、「構案を切り獲って詠う『写真短歌』として紹介することを思い立ちました。

（山形新聞平成 31 年 3 月 21 日掲載）



☆ぜひ自分の写真や他人の写真で感じた気持ちを紡ぎやいて言葉にしてみる！☆

♪ 2nd ステップ：写真短歌への試み（講師の例）

【自分の写真短歌例①】

<写真>

昨年の12月、クリスマスの1週間前日に当日の積雪が5cm程度だったこともあきさきをしなかつたのが幸いし、夕暮れ時に玄関先に出てみたら写真のような嬉しい出会いとなりました。子供たち（？）の洒落たプレゼント（？）に連れ合いと二人して久しぶりにほっこりし縁が結びとどなりずかさず写真に収めました。

<つぶやき>

嬉しい偶然 積雪（運命）が幸い？ 夕暮れ時 ぽつぽつ 縁が結びとど メリークリスマス 子供らの文字のいたずら描き（遊び） 洒落たプレゼント（？）

<言葉の整理>

積雪（に） 文字 子らの遊び（の）  
 描く（描かれし） プレゼント メリークリスマス  
 <短歌（未掲載）>  
 積雪に描かれし文字のプレゼント  
 子らの遊びの「メリークリスマス！」

28  
 Copyright SKZ/山形 SKZ SOLUTIONS SADASHI kuronuma (2001～)

【自分の写真短歌例①】

<写真>  
2月に入っの雪、庭庭の雪を見ていたらイルカの曲  
「なごり雪」が頭に浮かんできてカメラに納めました。



<つぶやき>  
イルカの歌 なごり雪 忘れ雪 近くて遠い春 妻との語らい くり返し  
<言葉の整理>  
なごり雪 忘れ雪 待つ春近し くり返す（行ったり来たり）と往還  
<短歌（未推敲）>  
なごり雪「これがそうね」と笑けり 妻も顔さ待つ春かし  
<短歌（推敲後：やましん歌壇掲載）>  
なごり雪「これがそうか」と笑けり 妻も顔く春の往還  
(令和2年4月27日付け「やましん歌壇」掲載歌（佐藤祥夫選）)



<写真短歌>

【自分の写真短歌例②】

<写真>  
数年前に家庭に挿えたジュンベリーが白い花が咲き  
実を付けるようになりその実実を収穫してジャムを作る  
備しみに負けています。  
一昨年から小鳥らに収穫の先を奪われるようになり  
ジャム作りの備しみが奪われつつあります。  
そのような状況をスマホに撮り込んで見ました。



<つぶやき>  
ジュンベリー 庭先 狹庭 収穫 食べ頃 小鳥らがよく見ている  
競いと敗北感 あきらめ 譲る一恵の共生 ⇒ 共生？  
<言葉の整理>  
小鳥ら（野鳥ら） ジュンベリー（の） 収穫（を）  
競い 敗北 譲る 敵わず  
<短歌（未推敲）>  
・野鳥らとジュンベリーの収穫を競えど敵わず今朝も敗北  
・庭先のジュンベリーの収穫を野鳥と競い今朝も敗北  
<短歌（推敲後：やましん歌壇掲載）>  
小鳥らとジュンベリーの収穫を競うも譲る「共生」のため  
(令和4年10月31日やましん歌壇大賞 受賞)



<写真短歌>

38

Copyright SKKグループ SADASHI kurozumi (2001～)

【他人との共同制作例①】：Facebook（FB）に投稿された知友の写真に短歌を添えた作品

<つぶやき>  
仕事で真冬に米沢を訪れた時の車中（車外は吹雪く雪原）の情景を撮んだ。  
この時はカメラを持っておらず写真を撮ることができなかったがゆに強い印象が残り  
備忘録につぶやきを記した。

<言葉の整理>  
列車 吹雪く雪原 女子高生 にざわり車中  
<短歌>

雪原を一輪列車通み行く女子高生ののびるい果せて  
(令和2年2月21日やましん歌壇掲載歌(宇野))  
<写真との出会い：長谷川圭太さん（山形大学）> (令和2年12月撮影)

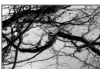


<写真短歌（共同制作）>  
この作品は短歌が先にできていて短歌単独の作品と  
なっていました。  
そのような折に（5年後）F日の友達（長谷川さん：  
当時山大王）が投稿した写真と出会い、自分の短歌に  
ピッタリと認い字彙を得て共同制作の作品としました。



【他人との共同制作例②】：知友から受領した菓子の写真に  
短歌を添えた作品。

<写真：三浦健一さん（文翔路ガイド）> (令和4年2月撮影)  
<つぶやき（撮影者三浦さんの菓書から引用）>  
餅石、サンビアの徳勝を歌状、ヤマガラに出会いました。  
冬枯れの枝ゆえ、姿を捉えることができました。  
3メートルほど近づいても逃げない、ひとなつこいんですね。我を忘れて、しばし、その  
小刻みな動きに見惚れていました。  
<言葉の整理>  
冬枯れの枝 ヤマガラ（山雀） 戯る 散歩道 見惚れる 僅う 幼少期  
<短歌（未推敲）>  
冬枯れの枝に戯るヤマガラに見惚れて僅へり幼少期

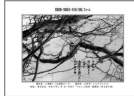


48

Copyright SKKグループ SADASHI kurozumi (2001～)

SKR Kurumashions ... 地域の良縁のコンセプターをめぐって...

<短歌（掲載後：やましん歌壇掲載）>  
 冬枯れの枝に處る山雀に  
 幾憶れて雫へりわが幼少期  
 （令和5年2月27日やましん歌壇并上智子賞）



<写真短歌（共同制作）>

【他人との共同制作例③】：Facebook（FB）に投稿された他人の写真に短歌を添えた作品

<写真：大塚優香さん（山形市職員）> （令和4年12月撮影）



<つゆやき（大塚さんの投稿記事から引用）>

今日は「ゆまがた舞子と花小路秋まつり」のお手伝いでした。  
 科学「担手展覧」を舞台にした初のイベント。人がいない時に  
 撮ったのでわりやくいけど、舞子の演舞は超満員、花小路は  
 人刀屋やキッチンカーで活気と賑わい。伝統の料亭文化が違う  
 角度から見えて、古いものが新しく見えるイベントだねと、  
 記者さんもいいね連発。

<言葉の解言>

花小路 担手展覧 人刀屋 科学文化 秋まつり  
 イベント⇒彫形 集める・集まる 日がな一日

<短歌（未掲載）>

花小路おもげ求めて集まりし集めし人の日がな一日



<写真短歌（共同制作）>

※ 3rdステップ：写真短歌作品鑑賞（知友の写真短歌作品例）

【佐藤紀之さん：山形市立図書館職員】

短歌：肩もたれに掛けし麻のジャケットは  
 仕事を終えた俺の掛け敷  
 （令和2年9月24日熱内新築地方版賞受賞作）



58

Copyright SKR/つづき SADASHI kuronuma (2001~ )

SKR Kurumashions ... 地域の良縁のコンセプターをめぐって...

【林 保彦さん：谷地八幡宮宮司】

短歌：夜半の雨止みて風たつきささげの  
 行くには惜しき花の下みち



※ 4thステップ（番外1）：

(1) 写真短歌作品鑑賞会 2F 展示ホール  
 山形市立図書館市民の出版物展 2022

「写真短歌 “への誘い”」「表現の社 “への誘い”」年間作品展



(2) 参考情報：

これまでの年間作品展山形市立図書館市民の出版物展  
 「写真短歌 “への誘い”」& 「表現の社 “への誘い”」

<2019年：写真短歌：チラシ>



<2019年：写真短歌12作品>



68

Copyright SKR/つづき SADASHI kuronuma (2001~ )

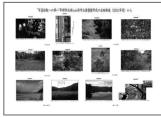
<2020年：写真短歌12作品>



<2020年：表現の柱6作品>



<2021年：写真短歌12作品>



<2021年：表現の柱12作品>



※ 5thステップ（番外2）：多様な表現手段（写真、短歌、俳句、イラスト、翻文、番等の組合せの”対”＝表現の柱。）の作品の紹介  
 地HP（下記URL）の「写真短歌・写真俳句・その他投稿コーナー」には2020～2022年の3年間で172作品の投稿が増えています。  
 それらの中から写真短歌以外の＜写真俳句＞＜短歌書＞＜写真翻文＞＜回文イラスト＞のそれぞれ一例を紹介しします。 URL：[https://sk-solutions.org/archives/tanka\\_g](https://sk-solutions.org/archives/tanka_g)

<写真俳句：写真俳句（吉田さん）>

俳句：凜と立つ様が私に生を問う



78

Copyright SKソリューションズ SADASHI kurouma (2001～)

<短歌書：短歌&書（佐藤さん）>



<写真翻文：写真（黒沼）×回文（おんみょうじあじきさん）>

回文：「ね、ダメ？」「ダメだね！」（ねだめだねね）



<回文イラスト：回文（おんみょうじあじきさん）×イラスト（にょん太さん）>

回文：「盆船」「秋風」



88

Copyright SKソリューションズ SADASHI kurouma (2001～)



#### 「IV コラム 飛耳長目／著作・投稿・寄稿」へのあとがき

5年前に続「私的アンソロジー」しあわせの構図〃の冊子版で発刊し知り合いの方々へ謹呈した際に、心身が許すなら75歳で続・続篇を制作したいと送付のメッセージに添えたことを頭の片隅におきながら少しづつ進めて来しました。

この続・続「私的アンソロジー」しあわせの構図〃の編集作業を通じて試行錯誤をくり返しながら分冊にする構想に至り、この「IV コラム 飛耳長目／著作・投稿・寄稿」への「あとがき」を書いているということは何とか発刊の目途が立ったと言え内心ほっとしている自分がおります。

これからの課題としてはこの冊子（続・続「私的アンソロジー」しあわせの構図〃）のデジタル化に取り組むことが残ります。

1947年山形市生まれ。ソリューション・コラボレーター。山形大学工学部卒業後日揮(株)入社。企画・プランニング・基本設計・建設・運転・プロジェクトマネジメント・営業などを通して海外および国内産業界の各種ソリューション(課題解決)・プラント建設・運転などを担当。1999年日揮(株)退職し山形にUターン。2001年(有)SKソリューションズ設立(代表取締役)。経営コンサルティング業の傍らCB推進コンソーシアム(プロジェクトマネージャー)、山形市福祉のまちづくり活動委員会(事務局長)、おいしい山形の食と文化を考える会(事務局長代理)、(LLP)山形ふるさと企画舎(代表)、地域力共創推進コンソーシアム(代表)、NPOパワーアップコンソーシアム(代表)、東北まちづくりオフィスサイトミーティング(運営委員)などを通じて地域力共創に関わる。2016年(有)SKソリューションズを解散しSKソリューションズ代表として活動中。

1995年 三人展(写真) @横須賀市

1996年 個展「しあわせの構図」(写真) @横浜ランドマークプラザ

2009年 DVD 私的アンソロジーを上梓

2015年 遊縁の衆として歌集【遊縁】を上梓

2018年 冊子&デジタルブック「続 私的アンソロジー」しあわせの構図」を上梓

「しあわせの構図」を上梓

続・続 私的アンソロジー “しあわせの構図”

「IV コラム 飛耳長目/著作・投稿・寄稿」

2023年3月13日 初版1刷発行

著者 黒沼 貞志

発行者 SKソリューションズ

〒990-0831 山形市西田1-12-10

Fax 023-646-2448 Tel 090-2522-4548

E-Mail [sks@sk-solutions.org](mailto:sks@sk-solutions.org)

URL <https://sk-solutions.org/>

印刷・製本 冊子印刷ドットコム(株式会社春日)

領価(分冊I・II・III・IVケース入り) 1,000円

© Sadashi KURONUMA/SK Solutions 2023